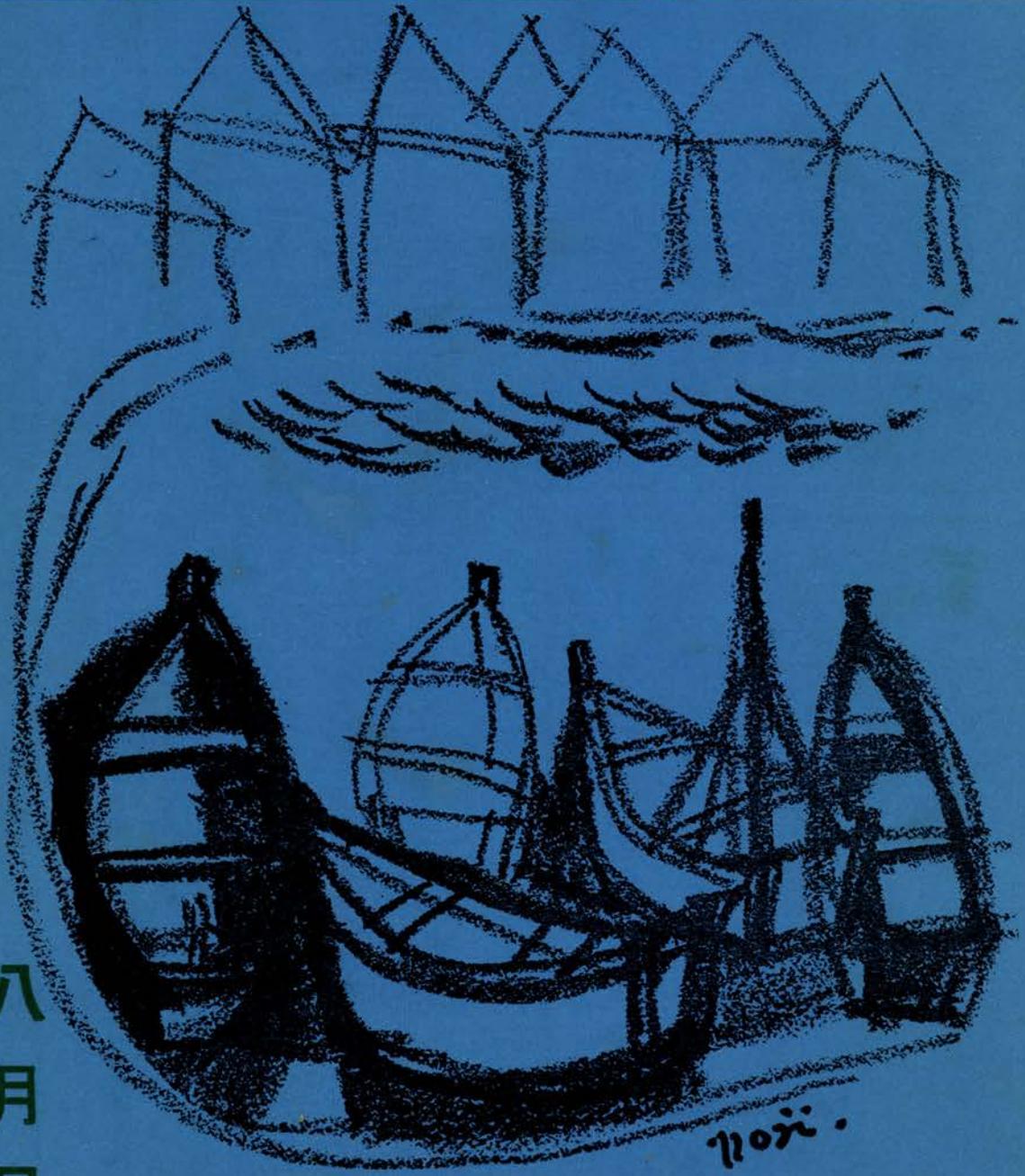


川柳の雑記



麻生路郎☆主宰

八月号

No. 435

Pensoj flugas trans la land - limon
THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

本社八月句会

初心者歓迎ノ

さあ、いらっしやい都心の川柳道場へ

日時 八月七日(水) 午後六時
会場 自安寺(〒211)一四七八番)

大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題「バックボーン」(二句) 麻生路郎選

(路郎選に限り七時半〆切り)

「菓」(三句) 中島生々庵選

「サングラス」(三句) 西尾 榮選

「ビール」(三句) 金井文秋選

席題 三題 (当日発表)

柳話 松江梅里

呈賞 ☆各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞
会費 百円

幹事 紫香・いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・

与呂志・清人・水洞・す・む・薫風子・柳

宏子・舟遊

★投句だけの方は郵券三十円

同封(〆切八月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪(671)六〇八一

9月本社句会予告

兼題
軸 女世帯
ゴム長
黒猫

大阪市文化祭行事

秋にひらく

(第六回)

短詩文学作品展

会場 毎日ギャラリー(北区堂島毎日会館地階)
会期 9月30日(月)から10月5日(土)までの六日間

自午前十一時―至午後七時

作品 短歌・俳句・詩・川柳作家新揮毫作品

(半折・横物・色紙・短冊等)

出品其他のご用件は大阪市住吉区万代西五の二五

(電話大阪六七一局六〇八一) 麻生路郎へ問合わ

されたい。

主催 関西短詩文学連盟
後援 大阪市教育委員会

川柳雑誌社

麻生路郎著 好評嘖々

新川柳超賞

川柳の味い方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとした

大阪住吉区万代西五丁目二五番地

発行所 川柳雑誌社

電話大阪(671)六〇八一
郵務口座 大阪七五〇五〇

価二五〇円

送料八〇円

B6版

二五〇余頁

不朽洞句帖

麻 生 路 郎

感謝に価する死刑もあるのなり

被疑者が急に笑い出したり

断なくて政治もなしと思いいる

当確にもう膝枕ひざまくら

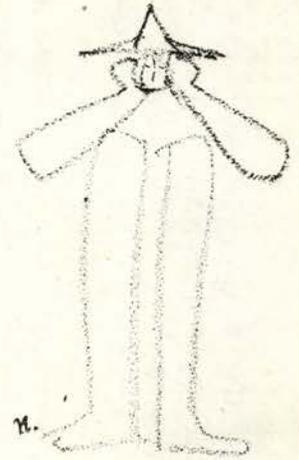
都心では恋も小さし点と点

すべてすだれの向うでの出来事さ

老妻もいつしかアクセサリーになり

鮎もわたしも妓らにとりまかれ

今では象も諦らめている



川柳雑誌 八月号 目次

★ 柳 室	一路集	男まさり	西尾 栄選	(36)
★ 柳 室	立読	田垣方大選	木村十悟選	(46)
★ 柳 室	不朽洞の人々	柳宏子の巻		(39)
★ 柳 室	柳界展望	(38) 不朽洞会から		(39)
★ 柳 室	各地 柳壇			(41)
★ 柳 室	金 泥 集	麻生霞乃選		(37)
★ 柳 室	近作 柳 樽	麻生路郎選	北川春巢選	(20)
★ 柳 室	同 舟 近 詠	諸 家		(15)
★ 柳 室	川 柳 塔	麻生路郎選		(6)
★ 柳 室	現代 柳人 録			(15)
★ 柳 室	大万川柳「悪名」発表			(40)
★ 柳 室	川柳まつりの特別課題			(30)
★ 柳 室	「先見」の発表			(32)
★ 柳 室	川柳まつりの記事と優勝者の言葉			(40)
★ 柳 室	志度浦の海女	富士野鞍馬		(19)
★ 柳 室	句評リレー	喜由・水洞 きさ子・幽谷		(16)
★ 柳 室	特集「戦中戦後あなたは何を喰べましたか」	喜由・甲吉・竹荘・晩童・専翁 むしな・靈眼子・春巢・普天		(25)
★ 柳 室	句集私達に現われた	直原七面山		(34)
★ 柳 室	名句と難句	麻生 路郎		(4)
★ 柳 室	川傍柳初篇研究	(五)		(12)
★ 柳 室	題字	麻生路郎		
★ 柳 室	表紙	野尻 弘		
★ 柳 室	不朽洞句帖	麻生 路郎		(3)

元気でいこう
元気をつかむ

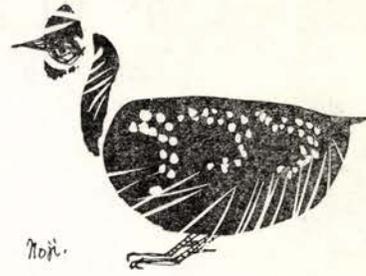
疲労・肩こり・神経痛

結合新活性ビタミン剤



フジサワ

ナイビタ®



川柳名句と難句

麻生路郎

〔五二九〕
筋通す癖老いてなお

損得の問題ではないというのが、この種の老人のつうゆう性である。

これは斯う、あれはああとというのが年と共にかたくなになってゆく。よい意味でこれをバックボーンだと言っている。

型は七音、五音で例外的に短句であるが、これ以上不必要な文字を挿入する必要のないほど、端的に率直に詠まれている。型は七音、五音だが、あとへ続く五音が省略されていることは想像し得られ、むしろこの省略によって含蓄のある句となつていく。この句は、倒置法によって構成されているので句意がウンと強まっていると思

結婚をして騒がれ、離婚をしても騒がれるのがアクトレスだ。だから、週刊誌や婦人雑誌ではこの種のネタは品切れにならない。

別れた女優はハンコで捺したように、職業人と主婦とは両立しないことを説く。そんなことははじめから判りきった話だが、結婚をする時には両立させるつもりであるからおかしい。正直なところ、女優も世間並の女のように一度は結婚したいのだ。

さて結婚をして見ると、職業の性質上主婦と両立しないことを、しみじみと知らされ、離婚話を持ちあがる。これからは芸術を夫として芸に打ち込むというが、それも長続きはしない。いくら騒がれても、ひつついたり、離れたり繰り返すのである。

〔五三〇〕
お芝居の様に女優は別れたり

それを第三者から見れば「お芝居の様に

女優は別れたり」なのであり、面白い観方の句だ。

〔五三一〕
天使どころかしなびきつてる婦長殿

(七面山)

いくら姿びていようと、アハハと笑っては失礼にあたるであろう。このナイテイングール老嬢は病院きつての古参で、既に表彰状を五回も六回ももらい、何かの機会に勲章まで受賞されているのである。白衣の天使と言えば、美しい看護婦さんが想像されるのに、眼の前にあらわれた婦長さんは天使どころか、姿びたお婆さんだったと皮肉つたのである。

〔五三二〕
又一枚未来の長島ガラス破り

(どんたく)

真夏の野球シーズンともなると、私の家のすぐ横の空閑地では未来の長島が、銀蠅

のようにウヨウヨして、「又一枚」どころか、何枚でもガラスをワツてくれる。庭先へボールが飛び込んで来るたびに、玄關のベルを押し代表者らしいのが堂々とやって来る。その度にお台どこの手順を狂わせられる。金網屋に塀高クネットを張ってもらったがそれでも追つかぬ。迷惑な話だ。こんなに沢山未来の長島を作つて、どうする気かと思つたが、拝啓池田総理大臣殿を書く気にもならぬので、未だに迷惑をかけられている。長島はプロ野球の本塁打王。

〔五三三〕

女まで無口にしたる暑さかな

(柳宏子)

口から生まれたような女という言葉があるように、女性はたいしておしゃべりなものとされている。

ところが、猛夏のころとなると、水銀が鯉のぼりに登ると、暑い暑いと口に出すさえおっくうになる。さすがにおしゃべりの女までが、無口になった。何んと暑いことではないかと詠んだもの。この句の場合、「かな」は詠歎を意見する。

〔五三四〕

さんばつ屋一糸乱れず仕上げたり

(竹莊)

面白い句だ。この句を讀むと、僅かばかり残った頭髪を流の白糸型にならべた人の姿がホーフツと眼前に迫つて、思わず微笑を禁ずることが出来ない。さんばつ屋の苦心のほどがうかがえる。

「一糸乱れず」がこの句のヤマだ。

〔五三五〕

連休疲れてネエと役人うそぶけり

(素身郎)

「どうです？ 元気がないようだが」と言えは、

「連休疲れてネエ」

と役人は事もなげにいう。

こちらは連休どころか、徹夜もしなければ追っつかないのだ。

役人に対する辛辣な批判句だ。

〔五三六〕

病室を閉め切り現金を算へ

(白雲)

いつ果てるとも知れない痼病生活者の詠んだ句だ。深刻な現実描写の句として味読した。残り少ない現金へ、病室を閉め切つて算える心境を何とも言えない闇い気持ちで読まされたのであった。それは遠からずなくなつてゆくこのカネがすつかり無くなつたとしたら、どうして生きようかということよりも、いくらかでもカネを持つてい

ることを人に知られたくないという心と、もしか人に見られて奪われるようなことがあつてはという警戒心が、こんがらがつて知らず識らず病室を閉め切つたことの愚直さを苦笑したのであらうと思う。

〔五三七〕

老人だけ市電の味を知ってくれ

(与呂志)

近ごろの都市では、年々殖えてゆく自動

車の交通マヒで、市電を厄介もの扱いしているところが多い。あつちこつちの路線を廃線にしてレールだけが、淋しく街路に放置され滅びゆく市電に眼を向けようとはしない。この句は最後まで市電に踏みとどまっている従業員の名スタルジャとして詠んだものだけに、多年お蔭を蒙つて来た私達市民にとつても一掬の涙をそそがないではいられない句だ。イヤ私も又その老人の一人である。この句の「市電の味」の字胸が特に光っている。

〔五三八〕

口だけはまだまだ女欲しがれど

(古心)

年とともに老いゆく姿は古木にも等しい。歯は借り物だ。ロマンスグレイと言いたいが、それすら覚束ない。耳は遠いし、眼は霞んで既に女には縁遠い話だ。でも、彼のビジョンは女に対する燃え残りが、つい女を口にするのである。

この句、老人心理をあからさまに表白しているとみていいだろう。

〔五三九〕

本殿へ通訳ぎこちなくお辞儀

(清生)

観光客の通訳はあつちこちの神社仏閣の案内で常にウンザリさせられるものらしい。

通訳は語学の勉強はしたが、宗教心には至つて弱い人たちが多くからである。

ここが大阪で有名な天満宮で、菅原道実が祀られていると、本殿の前に立つたが、もとより拍手を打つすべし知らぬ。そ

こで本殿に向つてぎこちないお辞儀をしたというのである。軽い穿ち句として成功している。たいていは形式的なお辞儀ですましておくところにユーモア味がある。

〔五四〇〕

冷戦の夫婦に小鳥見放され

(七面山)

日日の夫婦生活が冷めたい戦争の状態になった。別居寸前、離婚寸前の危機を孕んで対立しているので、小鳥の世話どころではないのであるが、小鳥にとつては死活問題となった訳である。一篇の小鳥の哀詩だと言えよう。

冷戦は、第二次大戦後、米ソを中心とする二つの世界の対立が激しくなつてから使われた言葉で全面戦争にいたらない範囲で、いさゝいの外交や、経済、軍事、心理その外的手段で、相手に危害や混乱を与え

〔五四一〕

青空に気がつき賑を

厭いおり

(清生)

眠むい眼をこすりながら電車やバスに揺られて出勤、終日ビルの一室で、濁つた空気を呼吸。そこに何ん等の不自然さも感じないなら無難だが、ひとたび青空の存在に気づいたが最後、いくら職業だと言つて

も、ビルの一室に幽閉されたような日日は仕事も手につかないのだ。

〔五四二〕

困われて生ける玩具となりけり

(甲吉)

落籍されて、生きたおもちゃとなるのも、考えようによっては生きる道の一つかも知れない。正妻でありながら生ける屍となつて生を続けている夫人もいる。人生いずれが幸福であるか判つたものではない。

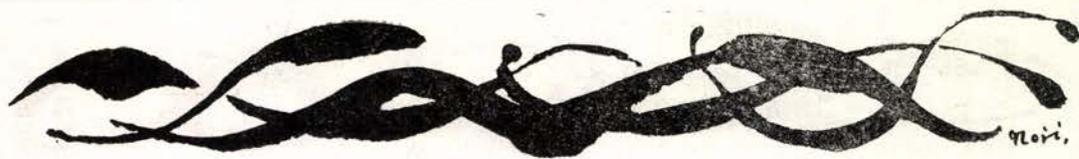
暑中御伺

麻生路郎



ビールは楽しいものです
人の心を明るくします
和やかな雰囲気をつくれます

ビールはアサヒ



川柳塔

麻生路郎選

伴せに女の肌は油ぎり

借家札貼って税務署戸感わせ

寝化粧の鏡は女の幸に酔い

岡山県 直原七面山

窓口で失保を貰う背を丸め

生甲斐は三面鏡のなかのひと

松の色抱いて動かぬ水のいろ

大阪府 西 いわを

贅沢をせえと社会に教えられ

長雨に美人の顔に艶がなし

大阪市 北 川 春 巢

釣楽し携帯ラジオ鳴りつづけ

補聴器屋から調子たずねて夏見舞

文楽で会えばマナーも違つて居

文学部姉女房のようなも居

世話せんでよいとサボテンくれるなり

ワイマル羽 佐 間 柳 葉

店員の六感値だけ聴くお客

古参記者時に推理が物を云う

沈黙は金と古参が眼で知らせ

堺 市 吉 田 圭 井 堂

下を這う唄を老妓が来て助け

早乙女も今日は休みの折たたみ

物価より派閥の方が気にかかり

防府市 長 野 井 蛙

アパートへ御先祖墳墓の地を逐われ

大阪市 中島生々庵

長電話うどんがのびますとも云えず

有児書の通りに弱い子に仕上げ

會長さん何ともけちな咳払い

感謝状と云うのに代読しらじらし

豊中市 若本多久志

長生きの甲斐人なみに孫を抱き

最大の事業は長生きだと悟り

大阪府 川 村 好 郎

神様が御存知ですとお頑固

縁がないのですと仲人労われ

貴方だけ明日も来てねとぬかしたり

忠孝という文字ありき墓碑も朽ち

俳人貞女逝去

まみゆるもなつかし虚子と詠み給え

大阪市 正 本 水 客

声出して笑うて立読み親しまれ

善意信じて支度だけしとく

野天風呂青葉の滝がおちてくる

高槻市 丸 尾 潮 花

歳だけに見えず定退見つめられ

伴せに女の肌は油ぎり

借家札貼って税務署戸感わせ

寝化粧の鏡は女の幸に酔い

岡山県 直原七面山

アロハシャツ東京弁で話し掛け

斗争が身についている終戦ツ子

後添いのこうもへそくる技に長け

良寛の円通寺にて

庭石にしむ良寛の子守唄

大阪市 西 森 花 村

金魚鉢狭けりゃ狭いよに泳ぎ

水引いて長屋の子供がっかりし

豊中市 足 立 春 雄

カットしただけで殺しが出来るとは

秘書だけが笑うと知つた社長室

迷い犬娘に負けて飼うときめ

ズバリその太さを見せたシームレス

大阪市 牟 田 一 哲

この辺り想い出しては廻り道

毒舌がたたつたのかと病み上り

大阪市 河 村 端 川

飲みたくてただ飲みたくて働いた

観光土産喰わせものとは知って買

倉敷市 木 村 千 客

老妻の指図通りに席に着き



倉敷市 田垣方大

面接試験猫がネズミをなぶるよう

新婚のデスクえ肘をつつき合い

坊さんもジツと見ているロケーション

だまつてりゃいい気になって勧誘員

軽口を叩き情事に縁遠し

加賀市 野村味平

うれしさも以下同文で扱かわれ

三味線のつぼも忘れてのろけ切り

金魚を二匹飼うてる賑やかさ

よう喋る男ミスなど多からん

大阪市 木村水洞

違反した人が唱える人づくり

姑がよすぎても嫁気がつかれ

役員名簿電話ないのは我が家だけ

頼られて養子の身分打ち合ける

大阪市 平尾太希志

民主主義老後はさぞかしさみしかろ

米子市 小西雄々

悪友がまたアリバイを頼みに来

故郷へ続く小道がよく曲り

教え子を妻にするため離婚をし

大阪市 山川阿茶

犬取りへ野良犬の方勘がよし

洋服を吊つとくだけに眺える

しぶちんになったを自分へ苦笑する

年輪は合三味線がどじつても

誕生日遺書書き変えるのも年か

公僕になるのになんで頭下げ

かくれ家で見た新聞のモンタージユ

良心が少しありそにホテル出る

加賀市 那谷光郎

押し込んで来た靴探す移転の荷

駈け引のない話だがとサバを読み

大阪市 中島小石

笑い忘れし白痴の子抱く母

気押された形息子ののみつぶり

混浴へさつと這入ってゆく度胸

大阪市 福井野迷路

可も不可もなくわからないだけで生く

思い煩うことなかれと宣えど

海難の審判とやら春うらら

奈良県 麻生アイト

常連にいつしか俺のファンが出来

僕の過去にもA少年は棲んでいた

夫なり父なりスモッグに汚れても

下関市 桜川不水

色彩のない屁女は五十どこ

岡山市 浜田久米雄

鐵置けばレジャーのバスがよく騒ぎ

がらくたの益裁朝の息吹きする

礼節のとおりにすれば追い抜かれ

大阪市 菊沢小松園

時間など気にせぬ性質の養子来る

同窓会出世したのを先に撮り

男四十切られた夢で眼を覚まし

出雲市 尼緑之助

鳥取砂丘にて

馬駱駝馬車が砂丘の景にする

アベックが映画もどきに走り行く

東郷温泉にて

遊覧船ビールがほしい初夏の風

大阪市 水谷竹莊

忙しいはず大安の貸衣裳

人の恋見ながらシェーカ今日もふり

世帯もつてから一べんにケチになり

週刊誌離婚の種を見逃がさず

お人好し母と妻とになやまされ

魚市場女も長い靴をはき

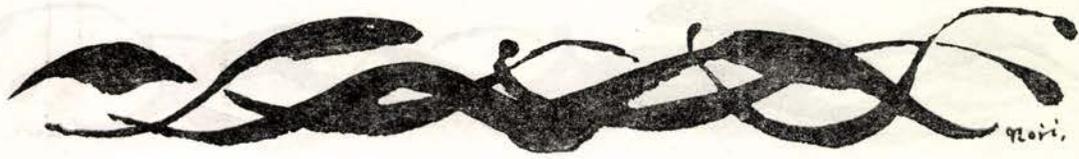
柳井市 弘津柳慶

もつとらしい伝説もある島廻り

観光地土産はコケシと羊羹と

ファストは課長遊撃気が疲れ

鳥取市 杉谷湖山



皆さんを幸にしますまた値上げ

手紙ならカナで書いてる母が上

解放と言う名にあんたも田を奪られ

京都府 大鶴 喜由

団地族天に向って呼び降りし

看護婦の指先ぐらい握らせて

まさぐってこれは子の顔妻の顔

尼崎市 小林 文月

広島へ出張二句

愛嬌のようにトンネルまた一つ

松島をあやかる島が群がって

付添の身の上をきく程に癒え

奈良県 飯降 白香

あげあしのとりあいだけで結論か

いもづるで上役するずる米転し

奈良県 西辻 竹青

学説のように社会はついて来ず

百姓を忘れて今日は京に居る

退職によせて

今日限りのビルをあおげば涙が出

呉市 林野 甦光

かくしゃくとして姑の座を守り

社長専務会長ブームのバーが混み

吊皮にぶら下ってもなにか読み

夕焼へ男まさりが涙する

岡山県 福島 鉄児

当てられに来たかど新婚気が強し

紙屑になった陛下のしわをのし

下半身だけは美人の生れ付

町長勇退

惜まれて去る男気の尊くも

岡山県 服部 十九平

まずいことになったとまずい顔で来る

マスコミに売れぬ詩を書き孤を愛す

尼崎市 長谷川 三司

どぶろくの世に美しき星のあり

売喰いをしてても歌舞伎見のがさず

西宮市 若林 草右

ウインクで掏摸がとりまく満員車

晴耕雨読税務署は容赦せず

ガードレールお前は案外弱かった

高槻市 山田 季賛

伸びる草やがて幹線走るとこ

あの家も立退きになる杭を打ち

岡山市 田村 藤波

誘拐をされたと娘を送り出し

祖父の代までは精農家と呼ばれ

児高市 本田 恵二朗

重文を護る老尼の楚々として

アラ借着なのねえネーム妓が見付け

鳥取市 森本 法泉子

病院へ来てまで暮しの自慢をし

妻入院一年一ヶ月

音たててウドンを食べたいのが願ひ

堺市 高崎 雄声

村会にさえ保守系の革新の

左り手は女房の役にもさも似たり

島根県 藤井 明朗

初恋は夷らず雲は流れゆく

数秒も無駄にはしないコマージュル

雨の日も雨の仕事がある農家

転落の子が欲しかった父性愛

岡山県 永松 東岸

父の日へ誰も振り向いては呉れず

割り込みへ顔を上げしげ見てるだけ

湯上りの女にも似て牡丹ぬれ

振袖に似て華やかに藤の垂れ

倉敷市 野田 素身郎

妻入院

妻病んで飯食うことさえわずらわし

妻病んでおならを笑う者もなし

恋人時代のようにあまえる病める妻

ランチタイムコーヒーだけの客が邪魔

若屋市 丸川 初甫

浪人はクラス会にも眼をつむり



出来心にしては犯行念が入り
移り気の妻は金魚を置き変える
頭から怒鳴る癖あり元閣下

岡山県 池田 古心

農繁の疲れも知らぬ夜の夫

通院へ大儀な日が出来有難し

小鳥にもお喋りが居て山樂し

東京都 石居 高志

春うらら雲雀は空に土筆地に

友情の限界を知る金を借り

奥さんに悪いわと云う顔でなし

俺の名で飲む奴がいてつけをやめ

大阪府 早川 清生

ネグロ無職銃とった頃なつかしむ

強い子へ媚びる子にする共稼ぎ

折伏に行こうとすれば寝びえの子

大阪市 西出 一栄

箕面から緑に酔うて戻って来

夜遊びの言いわけ妻に暗記され

あっぱれとほめてやりたい掘られよう

鯉のぼり上げては下ろす雨になり

産声を待って吸殻林立す

堺市 辻 圭 水

茶も花も習わぬ人が先に嫁し

息子もうカミソリ使うほどになり

えらいさんの都合時間の無駄云わず

大阪市 児島与呂志

小暴力とやらの証人で遅刻する

一家中を満艦飾してまだ洗い

岡山県 野々口 美舟

寡婦だったことも忘れたお湯の宿

内海の漁船へ長い帯をかき

田植など人のことです湯につかり

岡山県 池上 知恵美

今晩はムードでいくと云うジョッキ

うたがわざるを得ない風の吹き廻し

シリツタンテイの真似奥様にたまれる

当って砕けろと寄せては返す波

ばくちうちみたいいな空を相手どり

オッチャンのトリコでくらし楽になり

梅雨暗れへ草木も衣乾す如く

大阪市 橋高 薫風子

春愁か樟脳の玉なくなっている

大きな滝になろうと思う父の日に

囁くは人の飼う鳥武蔵野よ

螢飛ぶ一匹なれば人を恋わしむ

下関市 中村 九呂平

運のない同志地球に浮き出され

新築をほめてる税吏の口に乗り

山門を悟り開けた顔で抜け

言い馴れぬ言葉に水引固い笑み

掌に一口違いの玉子乗せ

奈良市 宮口 笛生

アベックで座っていたとこ潮満ちる

新鮮な果物に似た女子学生

神戸市 仲どんたく

年とればこんなになります母と娘と

鳩今朝も療養貴族の窓を訪い

ニコヨンの扶養家族の雑種犬

平田市 久家代 仕男

物価高栄養白書宙に浮き

デイトする靴丹念に母磨き

困われし身のひっそりと樹々の奥

大阪市 本多 柳志

愛してるからよとスター又別れ

随筆をあぐらで書いて寝て読まれ

有限会社と云う事にして社長なり

出雲市 原 独 仙

押し売りのあとで刑事の家と知り

バスの揺れヒップに触れた手を詫げる

その気持判ると言って貸しませず

西宮市 野呂 鶯 汀

感情を殺すに花を見付めて居

知るはずもなき人の目にうろたえる

親の目へ娘の背につきし草の実よ



人口度空気が無くはならないか

新潟県 高野むじな

都知事攻撃して文化講演会

十円の寄付にも外国ではと云う

履歴書は達筆だった新入社

学校防火演習

防火演習勉強よりはうれしそう

政治のせいにして討論のけりをつけ

大阪市 石倉旅風

思い出の母は素顔で笑いかけ

もうひとつ茶漬の味を知らぬ下戸

大阪市 魚住満潮

続西成界わい

けんか鶏のような夫婦に部屋を貸し

退屈男罰金刑にまだ懲りず

西成の天皇酔つてのびている

チンジャラジャラ臨月の腹前に出し

留置場の経験もあり若社長

十四のキャンパに親子掌を合し

愛媛県 村上旭童

長雨編

種麦を抱いて死ぬ日が来そうなり

詩もなく終日我家もりつづけ

頭だけ出して隣の島も霧

電気釜まかせの飯で又出かけ

神戸市 傍島静馬

母の日はねぎらい父の日はねだり

高僧もちらと美人をふり返り

里帰り母の背流すも久しぶり

丙午他人は迷信です済み

出雲市 野村岬月

子のために頑張りますが今日も酔い

愛犬の死に

口笛で呼んでも空があるばかり

大阪市 平沢保美

不覚にも子の眼の前を足で閉め

スラスラと読んだが書家の気に入らず

税吏来る伝令守衛にも走り

布施市 森下愛論

リクリエーションですわと夫婦喧嘩派手

夫婦喧嘩ラジオを携けて子は逃げる

大阪市 河井庸佑

首のない男に組合ひきずられ

ひき合いに何も知らない子も出され

ひかえめに言うたに先生の勘にふれ

大阪府 谷沢好祐

革新市長当選えら方をわすれ

ヨヨイが流行る歴史は繰返す

縄飛びをはしかが見てるカラス越し

降り出せば傘も売ります土産店

堺市 高津徹也

カヤの中母のうちわが快よく

麗人の立ちふるまいが素直でない

愛媛県 榎紫光

業界紙下手な俳句も載せてくれ

靴紐が切れたぐらいで社を休み

行商の背なの子供も陽にやけて

神経痛しばし忘れてエロ雑誌

青森市 工藤甲吉

天皇、皇后両陛下御来県

天皇へ瓜立ちをして孫を抱き

皇后さまのバッグを女房拌んで来

自衛隊の奉迎

天皇の頬がこわばる捧げ鏡

浅虫水族館での天皇

天皇もほほ笑む蛸のグロテスク

天皇へいっこう貝の無表情

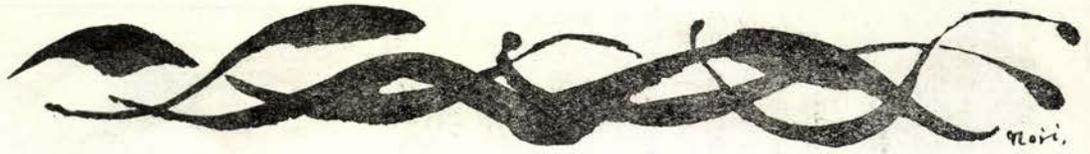
松江市 小林孤呂二

青葉よしプランどおりのコースとる

冷やっこきん張した気をほぐすなり

百姓はいけませんいけませんと家を建て

大阪市 今西生薑



余ッ程応えたのかそれからは顔そむけ
老化防止蜂の餌まで取り上げる

京都府 室井八九寸

カネとヒマ揃わず夫婦歳をとり

駅弁の殻を蹴り込みコンバクト

村議から市議に進んで標準語

岡山県 横山 一声

退院が死の警告だとは知らず

おもちゃ売場近代兵器ばかりなり

小松市 関戸宗太郎

包装紙女心をまずとらえ

あやめ咲く沼の臭いを消すように

罐ビール冷えて着がまだ釣れず

云い負けて古新聞をまだ探し

ピクニック帰りは母へみな持たせ

和泉市 井阪東天紅

本日休診うかつにも病みにけり

大阪府 高橋 尚史

妾宅の子どもなくて雛祭

B Gのコヨリは知らぬホッチキス

団地なる規格にはまった顔で住み

諫早市 川岡 靈眼子

大阪に出る心算り

いざ行かん坪百万の土踏みに

運命に負けない膳の箸をとる

貝塚市 杉本 一鶴

軽快なツバメを見てる熱の顔

雨雨雨盗汗盗汗へ着替がつきる

富田林市 浅川 八郎

抱き癖をつける心算じゃなかったが

岸和田市 内藤まさ子

罐詰をよう開けぬ母怒る父

コメディアン脱けたカツラはミスでなし

梅雨晴れにここにも日曜大工居る

名所から少しはなれたい景色

長雨の何にむかって怒鳴るべき

青森県 木村 涼人

若さとはスピード違反自慢する

ストライキならば徹夜を意ともせじ

キスシーンに顔そむけたは親ばかり

スマートフォンに見せたいハイヒールの努力

倉吉市 奥谷 弘朗

はったりも少し認めて委員長

大物の違反途中からぼかし

係長ぐらいで労組がいやになり

ストしても署長は皆生の湯につかり

兵庫県 遠山 可住

健康を一人占めして白痴なり

金をとる肚話をこじらかし

字が下手とわかって話し振りも変え

兵庫県 河原みのる

明治の郷愁(二句)

天皇サマのテレビや足など引っこめろ

気を付けを云いたいような御ンテレビ

姫路市 隠岐 不醉

左遷でも長がついたと気をようし

ゴールデンウィーク子供の守に困り果て

強情な女あくまででもと

大阪市 田中 敏行

セットした妻よそ行きの顔でいる

ここまでよと一年生を送る母

腕時計とにらめっこしている赤電話

鳥取県 清水 一保

御意見はないかと意見聞く気なし

物忘れまでもパパ似にしてしま

出雲市 中川 晃男

半分は削られて来る予算案

橋の名を残して川が埋められる

松江市 柳 楽 鶴丸

出世の為と四十でペンを取り

女には弱く女性自身読む課長



川端柳風氏

川傍柳初篇研究 (五)

川端柳風 清博美
高須啞三味 藤井和雄
前田喜代人 丸十府
柘植金治 岡田甫

30 物申といふはづ硯水がなし

一甫

柘植「物申」とは、他人の家へ行って案内を請う声。ここは水売りと解す。享保頃より明治初頃までであつたらしい。一荷百文。「水屋さんか、なるほどもう硯に水もない頃じゃ」と家の主人が言っているのであらう。

清「物申」は武士階級の言葉。「水売り」は、飲料用の水を売って歩いたもの。とすると「硯に水がなし」とどう結んだらよいか、不明である。

藤井 硯の水がない程度の水量に、水売りにまで用はないであらう。「物申」の主人はやせ浪人、隣へは余程の事もなければ顔を出さぬヘンツツ家、この御人が隣へ水もらいに出かけたのだから、無心の手紙か？硯の水にまで事缺いては、頭を下げるのが大嫌いな先生も、隣へ「物申う」といわざるを得まい。「物申といふはづ」である。

川端「物申」は案内を請う声で「御免

下さい」の意味で、武士階級に限定する必要はないと思う。この句は正月の句で、年賀客が玄関に出してある訪問客の名簿(現在の名刺受)に名を書こうとしたが、硯に水が無くなっていて、書くことが出来ない。そこで案内を請うたのである。

高須川端説に賛。それで「言う筈」が解ける。この句は頂ける。

前田「物申と言はる、迄に成りあふせ」(タル一)があり、武士階級の用語にとらなると、川端氏の解が活きない。正月の句とはよくみられた。

丸川端説賛。「物申」はもともと武家の言葉であるが、「物申」の用例を見ると、必ずしも武家に限る必要はないと思ふ。

岡田川端・丸説に賛。年礼の句。町人でも年礼まわりにはカミシメを着けたのだから、改まった気持ちで「物申」というわけで、丸説のように、武家でなくても使用していた。

31 木娘ハこうくがありくく

鼠弓

柘植「木娘」は生娘で硬い感じを出している。「こうくう」は「香々」香の物の意。生娘は香の物でも見ているようで、色気はないという句。

清「木娘」は「生娘」と解して、まだ結婚していない娘のこと。香の物でも見ているようで色気がない、というのではなく、色気がない故に、香の物をガリガリと音をたてて食うという描写句。

藤井清説に賛。川端「香々をほりほり音をさせて食べている、世間知らずの無邪気な様子が、娘であるだけにユーモアを感じる。

高須「大体諸説どおりと思うが「こうくうがありあり」とは、何か？「香の物」を香の物らしく「ありあり」食べるといふ句なら「香々を」をあてであらう。私が選者なら、この句は没だ。可々。

前田清・川端説に賛。句は平凡。丸川端諸説に賛。木娘は生娘のあて字か、または「引はいておこすむすめは木ぞう

也」(タル六、同九)のように、木のよう

に人情の機微を知らぬ未成熟の娘の意で「木」をあてたのか、いずれにしても、春季発動期の少女、「恥しき知って女の苦のはじめ」(タル一)という恥しさを知らぬ頃の少女をいう。川柳では、木娘、生娘両方を使っている。なお本句の類句。木のやうなはだなを娘がありくく(タル三)

——はだなは大根、ここは大根漬。

岡田「木娘は生娘の宛字で、時折り使用されている。

32 むねを合て坂本ときらゝ坂

米子

柘植「坂本」は比叡山の東麓の地で、信長の建てた坂本城があり、「きらら坂は京都の修学院前より延暦寺に登る路。元龜二年、朝井、朝倉に加勢した延暦寺を焼打ちにしている信長の城坂本ときらら坂、つまり延暦寺の対立をいっている。もう一つは、坂本からも今は延暦寺に登る事が出来るが、当時も登る事が出来たなら、丁度向かいあって登って行くような感じになる。どちらを取るべきか？

清「最初の解釈を採る。

藤井「歴史と地理の句。ただそれだけではないか？

川端「不明。「坂本」からも「きらら坂」からも、比叡山に登ることが出来る。「むねを合て」が鍵であらう。

高須「胸を合せて」は「同調して」ということであり、歴史と地理の句には違いないが、どうも判らぬ。

前田「わからぬ。「胸を合せて」は被

清^二「真間」は、下総市川の真間山弘法寺。正燈寺や海晏寺と並んで紅葉の名所である。しかし「正燈寺どうだといへば知れた事」と正燈寺は吉原に近く、「海晏寺正燈寺より安く売り」と海晏寺はこれまた品川遊廓に近い。従って、正燈寺や海晏寺への紅葉狩は、ついつい遊廓にくり込むことになる。ところが、弘法寺となると、まるっきり遊ぶ所がない。「地へ足の着く人ばかり真間へ行き」であり、「見物は真間へうり人は正燈寺」である。そこで、亭主もゆうゆうと女房に髪を結わせることができ、女房の方も安心して送り出せる。

藤井^二清氏解に尽く。

川端^二真間の紅葉狩は、名物笹屋の饅頭を食べる程度で、野暮で銭なしとさげすまれたので、清遊でよいと思う。それで女房の手で髪をゆっても、少しくらい乱れていても、一向に気にする必要がない。

高須^二礎解に尽く。但し、読みは「女房に髪を結わせて真間へ行き」か？

前田^二諸説通り。読みは高須氏に従う。

丸^二川端氏説の如く、誰に見せる髪でもないから、別に髪結いに頼む必要もない。「鼻のさき斗あらって真間へ行」(傍三)も全く同様の句である。

岡田^二真間の紅葉は、今もって見事なもの。ほんとうかウツンか、真間の手古奈の身を投げた井戸というのが、農家らしい庭の中にありますが、これは見る価値もなし。

38 婆々ア迄紐をゆるめる三会目

泉河

清^二御存じの通り「三会目」とは、一度目の初会、二度目の裏、三度目の三会

目で、三会目にして初めて、客と遊女が結ばれるわけだが、この際、客は床花を出し、遣手婆々々にも一分の祝儀を与える。婆々々の愛想が良くなるのも当然だが、ここにどうして「紐をゆるめる」という言葉を持ってきたのか、いささか疑問だが、「紐」といえば、湯文字の紐のこと。地女の湯文字には紐をつけたが、遊女のそれにはつかなかったはずである。遊女が帯をとく、ということ、婆々々が心の紐をゆるめる、ということ、をシャレタのさうか。

藤井^二何の紐か、小生にもわからぬ。安心するところであろうか。

川端^二「紐をゆるめる」は「うちとける」の意味で、心の紐をゆるめても意味がないから、うちとけて顔の表情もやわらいだということであろう。

高須^二礎解の最初でよしと思う。「紐をゆるめる」に、強くだわる要なしと思う。遣手婆は、女郎を猿の如く使う猿回し同様と見て、その綱をもゆるめる意味で「婆々々迄」と言ったのは、相手の女郎同様の意と解してよいであろう。

前田^二前説の「猿回し」のたとえはいただけないが、「紐」にこだわらず、川端説の「うちとける」ぐらいの軽い意にとりた

拓植^二祝儀で今にも紐をとかんばかりの姿体。「紐」は湯文字の事ではなく、中紐(？)下帯の事で、着物の裾を整える紐でよいと思う。(因みに下紐の色は、着る物の色によって違った由)湯文字には紐はつけないのだから、帯を解くといわず、紐をゆるめると面白く言ったのである。

丸^二句意は諸説でよい。「紐をゆるめる」には意味がある。三会目にはふつう馴

染金を出し、遣手に一分の祝儀を出す。遊女はここで初めて下紐(下着を整える紐)を解いて客に接する。また客の定紋のついた箸箱をととのえて部屋におく、また客の帰る時は大門まで送る。こうしたならわしをふまえて、俗に「顔の紐がゆるむ」とか「ほころびる」といったことばとかけた表現なのである。

岡田^二女が男と打ちとけて寝ることを「下紐を解く」という表現をすることは、古歌を引くまでもなく、古くからの習わし。女郎は下紐を解き、遣手婆また財布の紐を解く。「婆々々迄」の表現は「女郎は三会目だから勿論下紐を解くが」を暗示した句作である。

39 しんくゝと積るにもゆるもらひ引

眠狐

清^二「貫引」は、芸娼妓が他の客に呼ばれたため、今までの座敷を引き退がり、他の座敷に行くこと。冬の座敷、しんくゝと雪がつもって、遊客も帰れない。従って、芸娼妓も不足がちになる。そこで、あちこちの座敷で、客と芸娼妓がもめることになる。「お座敷を下さい」「いや、もつとここに居ろ」と。

藤井^二同感。

川端^二キャバレーでも、幾つか指名がかかる、いらいらしてくる。雪が降っていると尚更のこと。雪までも憎くなる。「貫引」どっちへ来てもよりかかりで、いさか

高須^二礎解、親切。

前田^二同感。

拓植^二「しんしんと積る」は、段々夜が更けて行く事と解釈していた。どちらの客も引き込まないで、なかなかラチが明かな

品質優良
タチカワペン
TACHIKAWA PEN



大東市東区一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ
タチカワ 画紙

い事と。

丸^二礎稿贅。

岡田^二相方の女郎を貰いに来られて業腹で、しゃくにさわるから、飛び出していっそ帰ろうかと思っても、外は大雪で帰られもせず……という状況。

輪講誤植訂正(前号)

十二頁上段一行目(原句)「よく手が」は「よく御手が」と「御」の字を挿入、上段八行目「用人の手を」は「用事の手を」、三段十四行目「近常説」は「川端説」十三頁上段十二行目「来たのだ」は「米ないのだ」十四頁上段十七行目「猪突猛進」は「猪突猛進」と訂正。

詠 近 舟 同

今治市 長野 文庫

東京都 阿部 佐保 蘭

歩いたらよい人が持つ自家用車

雲なけりや穂高と僕と差し向い

人の目に熱心と見え馬鹿と見え

清流に彼女の指もすき通り

よい時代なり警察へ楯が突け

山の小屋ランプも入れて一つ撮り

飾りもの暖炉の上の置時計

打たれてる湯滝8ミリ見逃さず

目がさめず家業を継いで世を終り

城の窓からアベックの芝生見え

手袋もしたし指輪も見せたいし

松本にて

和歌山市 秋 月 宏 方

今治市 月 原 宵 明

庶民持つビジョンの一つ宝くじ

株式の講演お菓子まで配り

蠅曰く食料難を知りません

片言でうちのくらしを云いふらし

はでな物音独身寮の朝となり

笑納をしたが汚職の始めなり

モンタージュホシとは見えぬ顔に出来

枸杞を呑みなさいと女将に笑われる

名古屋市長 谷川 鮮 山

須坂市 高 峰 柳 児

子の眼から隠す刃物の置きどころ

煉炭の赤さ早寝を惜しで寝

性なしに酔うてみたいと夜の蝶

媚も織り交せてマッチをすつてくれ

戯談も云うて聞き込みたくり出し

抜てきヘストの斗士が一人減り

大阪市 橋 本 緑 雨

大洲市 米 沢 暁 明

素直な様でシンある娘だとほめ

検査官同志喧嘩をして帰る

ラッシュ時に足を踏まれたがだまって居

出席にしといて土産買いに出席

松根氏の新築

むしろあっさり怒鳴られた心地よき

新築が眺めをほめるところに建ち

退職は看板おろしたようなもの

- 綴方僕でないのに叱られた
- (196) 水 谷 谷 水
- (一) みずたによしお 水谷義雄 (二) こくすい 谷水 (三) みずたによしお 水谷義雄 (四) 倉敷市水島常盤町八ノ六六 (五) 大正六年四月七日 (六) 名古屋市中区七本松町二ノ四三 (七) 会社員 (八) — (九) 二号
 - さんも犬も秋田の産の由 (二〇) 鉢作り植物 (二一) 有 (二二) 昭和二十五年十二月

現代柳人録

(197) 石 倉 旅 風

(一) 石倉重雄 (二) 旅風 (三) 目八 (五) 明治三十三年七月一日 (六) 和歌山県伊都郡見好村東茨田 (七) 会社員 (八) — (九) 独り

旅夕陽に西をおしえられ (二〇) 詩吟 (二一) 有 (二二) 大正十一年

(198) 杉 原 愛 鳩

(一) 杉原信義 (二) 愛鳩 (三) 町 (五) 大正五年一月三十一日 (六) 広島県竹原市竹原町 (七) クリーニング業 (八) 竹原・七三六 (九) ゴルフ場向うの田では稲を刈り (二〇) 音楽 (二一) 有 (二二) 昭和十五年八月

(199) 杉 原 愛 鳩

(一) 杉原信義 (二) 愛鳩 (三) 町 (五) 大正五年一月三十一日 (六) 広島県竹原市竹原町 (七) クリーニング業 (八) 竹原・七三六 (九) ゴルフ場向うの田では稲を刈り (二〇) 音楽 (二一) 有 (二二) 昭和十五年八月

(200) 杉 原 愛 鳩

(一) 杉原信義 (二) 愛鳩 (三) 町 (五) 大正五年一月三十一日 (六) 広島県竹原市竹原町 (七) クリーニング業 (八) 竹原・七三六 (九) ゴルフ場向うの田では稲を刈り (二〇) 音楽 (二一) 有 (二二) 昭和十五年八月

(201) 杉 原 愛 鳩

(一) 杉原信義 (二) 愛鳩 (三) 町 (五) 大正五年一月三十一日 (六) 広島県竹原市竹原町 (七) クリーニング業 (八) 竹原・七三六 (九) ゴルフ場向うの田では稲を刈り (二〇) 音楽 (二一) 有 (二二) 昭和十五年八月

(202) 杉 原 愛 鳩

(一) 杉原信義 (二) 愛鳩 (三) 町 (五) 大正五年一月三十一日 (六) 広島県竹原市竹原町 (七) クリーニング業 (八) 竹原・七三六 (九) ゴルフ場向うの田では稲を刈り (二〇) 音楽 (二一) 有 (二二) 昭和十五年八月

味の七-コ

東へ 辻の北 丸大 橋心

御 門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい

由 洞 子 谷
喜 水 さ
鶴 村 藤 口 幽
大 木 内 江
京 都 市
大 阪 市
岸 和 田 市
津 出 市



評 句 リ レー

女教師のあれで男の子が怒れ 静水

喜由 この女教師を一寸見たらやさしい顔をしていて生徒からなめられそうに見えるが、その反面生徒を御する術を心得ている。それは鞭を振るとか白墨を投げつけるとかでなく、常に男の子を観察しその心に溶けこんで、あなた方はこう言いたいのでしょうか、こんな考え方をしているのでしょうかと素破抜く、だから男の子は恐れ入る。

句相、「あれで」はあれでいいのでしょうか、具体的に表現して欲しい、でないと人々によって想像を逞しくする。

水洞 女性はあるべく多くの人に好かれるという意識が強いのが通例だが、教師という職責上嫌らわれる事も言わねばならない。殊に脱線しそうな男生徒には、責任觀念の強い女教師と思う。「あれで」は器量も気立ても標準以上であるという反語的意味にとりた

い。
きさ子 女教師と申しましたも、むかしむかしの先生は束ね髪に地味な着物を着て袴を穿いた先生スタイルを想像しますが、最近の先生はパーマをあて、美しく化粧をしていますとちよっとBGと区別のつかない時もあります。しかしひとたび教壇に立てば、そ

の本領は発揮されワンバク坊主も一目おくといいものです。この句の「あれで」というのは女教師の外観を指しているのか、やさしい言葉、態度を指しているのか一寸想像がつかかえるのですが……。

幽谷 女教師のあれですが、この句の味噌でもあろうが、又拡大解釈すると、果して何が適しているのか判然としないが、兎角近世の男学生は先生をひやかすことを一ツの趣味位に考えている。特に女性であれば尚更であろう。この女教師は彼等がひやかすことをちゃんと見抜いて、その隙を見せない、むしろ生徒の方が蛇ににらまれた蛙のようなムードをつくらせている。このタイプがやさしく見える女教師である故に男の子が恐れているのである。

生徒の心理を十分把握している名教師であろう。
水洞 この句では「あれで」が問題点だが、「男の子が恐れ」である以上「女教師」を直視しなればならない。生徒を御する術とか、やさしく見えるタイプ等の人為的な外観ではなくて、腕白な子供心にも一目おく女教師の「人格」が「あれで」の奥に秘められていると思う。

きさ子 この句の「あれで」が人によっていろいろ解釈の仕方が違うだけにむづかしいですね。ス

ッとそのままで一読すると「なるほどなるほど」と思いつながら、何べんも読んでいるうちにだんだんわからなくなり、こうして俎上に乗せてみますますむづかしくなってしまう。私はスックと一読していいなと思っておきましよう。

幽谷 何もあれでのあれが判然としないからというて無理に三原色の赤青黄のようにはっきりしなくともよいので唯はっきりしないというだけである。あれでの奥には教師としての真髄だけはちゃんと身についているからこそ生徒が恐れる、しかもそこを女教師であるから対象を男の子としてあるので生きている。

怒りまだ残る座布団裏返えし 鶴灯

喜由 ああ言えはこう言う、こう言えはああいう、これではらちがあかない、いきどおりは当然トサカに來るばかり、判って頂けないのかなあと言えは、それは見解の相違よと逃げを打つ、やむなく座布団を裏返して帰路につく、まるで三段論法で行けばよかったと気付いたが時すでに遅し、心では怒っているが言葉は至ってやさしい、そうかといって何と云いましい限り。

句相、いい句とは思わぬが直しどころがない。何で怒っているの

疲勞・肩こり・疲れ目
脳溢血後遺症・夜尿症
便秘にも！
●効果も強める
●大量療法

タケダの 活性持続型ビタミン
アリナミンで活かづくり

か知りたい。

水洞 女性では線がつよすぎる。養子的な人よりも、相手に対して、はっきり意思表示の出来ない立場にある人を見た。本当に怒っている男の句と思う。
きさ子 座布団を裏返したのは怒った本人かあとの家人か……ちよっと判らなかつたんです。でも皆様のお説で納得がゆきました。

幽谷 あの手この手と色々話し合いをしたが、どうも了解点が見出せない、話し合いはもう時間の浪費だと思つた途端彌撒が浮いて、立腹の極に達した、よし帰るかと思つた、然し話し合いの途中和解の糸口もないではなかつたので、このまま別れてしまつては笑みさえさ

れ損だと、じつと怒りの虫を押えて相手に礼儀を正して座布団を静かに裏返して次期を待つところであろう、この座布団にかけた手が震えているのがよく見える。忍従の精神をよく表わしている。

「……残る」は「……残し」としてはいかが。

喜由「この怒りは狭く深く掘り下げて削るべきではないかと思ふ。そうすればそこに中傷、違約、食言、ヤユ等が出て来て味が出ると思ふ。」

水洞「自分の意思や意見を充分吐露した上での敗北なら感情の隅には自慰するところもあるが、この句からのイメージはそうとれない。一と通りの意見は述べても、それ以上を主張出来ない立場の無念さが、「座布団裏返し」に籠っている。

きさ子「皆様のお説を総合して参りますと、いわゆるこの句は「生命ある句」として生々しい息吹きが感じられる句といえそうです。」

幽谷「実感句であろう。すましていても神様はゼニが好き
兎

喜由「これは神社のさい銭箱を詠んだのではなく、かい添役を通じての神様の欲を言ったものと思ふ。神様が巫女に乗り移ってしかかとのたもう、その一つ一つが

ゼニにかかわりがある。御利益を得るにはゼニを積んでからかねばならない。

句相、「すましていても」が最上の表現か、も一度推こうしたい。

水洞「村社とか郷社とかいった神社の事ではなく、新憲法下に派生したもろろの新興宗教の一つだろう。「すましていても」だから句になっていく。」

きさ子「この句をじつと見つめていきますと、漫画になった神様の顔が浮かんで来るように思われます。神様とゼニについて私も体験したことがありますので……何げない中にも心に訴えるものがあります。ゼニがなければ神様は営業が出来ない。だから人間がゼニを捧げて営業をつづけてもらう。そうしてご利益をいただく……鶏と卵の関係でしょうか、すみません。」

幽谷「神様というものはしんげんそのものですと形容するからには神様がここでは人間であると思われ。然しこの句は体験がない者には理解出来ない。」

神の中の神とも言われる明治神宮でさえ今は一部にボーリングセンターなど貸地して収益を計画している。これもゼニが要るのだ。ろくに修業もしない人間が神様を利用して善男善女を相手にご利益

があるかのように多額の金を納めさせているのか。よく分からない。古川柳に「緋衣を着れば浮世がおしくなり」の神様（人間）なのか。

喜由「これには神様と代行の神様とあるが、即座に後者に極めていいものだろうか、句に対する想像は勝手だが、文字の上の想像には限度があるのではないかと思ふ。」

水洞「この句の「神様」は在来の神社の事ではあるまい。平和憲法になって公的な補助はなくなつたが、神社には相当数の氏子が残っているから露骨な営業用の顔をしないでよい。又戦前からある二三の有力な宗教団体もそうである。「神様」を看板にして一と儲けを企む宗教家を諷した句と見る。」

きさ子「神様を看板にして一と儲けをする宗教家の姿と見るのもよいでしょうが一段と進んで心から尊敬している氏神なり仏様なりもやはり隆にまわれれば何々の普請であるとか大祭の費用だとか言つて臨時の費用が徴収されてくると一銭も要らずに霊験あらたかな神様なんて世の中には無いんだなあと考えて来る。」

静かな神前にかしわ手をポーンと一つ打つとすました神様の顔が想像出来ます。

「カネ」と言わずに「ゼニ」と言つたところが面白い。神様とゼニを結びつけることは神自身の面目にもかかわると思ひながらも本当は一番縁が深いのではないかという皮肉が読みとれます。

幽谷「信すれば鯛の頭も神となるのだ。こうした神はゼニも物も求めはしない。矢張り神という人間のあさましさであろう。人間なるが故に貪慾でもあるので、すましていても偽装であろう。」

無責任時代おもちゃの手錠
方大

喜由「要点、無責任には手錠が待っている諷刺。自由と放任をはき違えている今どきの若いものといえ、学があるなあと嘲笑されたが、この頃やっぱり笑う方が間違っていると知つた。悪が盛んな時は善は中々見返つて呉れない。それが壁にぶち当って改めるのは被害がそれだけ大きいから救うのは今だと叫ぶ人があちらこちらに出て来た。この句は現在の世相をおもちゃの手錠にこと寄せて諷めていく。いい意味悪い意味の刺激で現

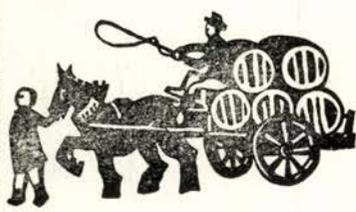
在の女性中には二年以上早く初潮を見る、つまり体が二年程早く大人になったようなものだ。しかし心はそれに追いつけて行けない。心は大人にならない。この点男性の中にも似たようなことが言える。つまり未成年が罪を犯しても大人の罪はきせられない。道徳を踏みこむのはへっちゃらで法律の網をくぐるのでなく乗りかかって来る。自分の行動には責任をもちたいものです。

水洞「今の世相の一つを表現した「無責任時代」の流行語をはめた諷刺句。「おもちゃ」「手錠」でなければならぬとは思われない。」

きさ子「私はまだそのおもちゃを見たことはありませんが、なんぼおもちゃでも手錠まで作らなくともよいと思ひます。本当に無責任時代ですね。」

幽谷「手錠というものは誰でも

★ホップのきいた本場の味…



サッポロ
ビール

持っているものではない。この手鏡を玩具とはいえ、一般社会へ送り出す者、売り出す者、あるからには子供らはこれを持って犯人になる子あり、警察官になる子ありで、悪へのスリルを感じながら遊ばせるといふことは、現在しきりに叫ばれている青少年対策に逆行するものであるが、これが金儲けであれば手段を選ばない人間がいる。よく諷刺している。

喜由―「無責任時代」までは川柳の最も大切な今日をよんでいるが、そのあとが何か抜けている。無責任の実態を深く鋭く表現すべきだと思う。

水洞―子供がおもちゃの手鏡で探偵ごっこをして遊ぶ世相悪を諷刺しているというよりも、作者はむしろ商人道に外れた手段を選ばぬ、売らんかな、儲けんかな、の商売根性を痛烈に諷刺しているのではあるまいか。

きさ子―私も水洞様の説に同意です。
幽谷―実は動く句ということも出来よう。手鏡あり、ピストルあり、それに最近では本物をつくりの蛇あり、百足ありで、手鏡にすれば子供の遊びになり、蛇やむかでのとなると大人ももてあそぶだろう。然し手鏡で面白い。

PTA マダムは生地の顔で
居る―甲吉
喜由―日頃の高級塗料とかけはなれて今日はやむを得ず生地の顔

で出席する、勿論心はそれと逆いい面ばかりにカムフラージュする。生地の顔は好まないが、こと教育に関する事であれば仕方がない。マダムは内心これが本当の自分の顔であるとは思っていない。

今日の課題の「社会悪に対する生徒のあり方並びにこれが補導を如何にすべきか」がもし出たと仮定したら鹿爪らしく一応意見は述べるが、うちの子に限っての自信過剰は捨てようと思わない。あの日あの時繁華街で逢った女王みたいないでたちとこれが同一人と言えようか。子供に嘘を言っているけないとたしなめながら、掛かって来た電話にもう嘘をついてい

酒 清



灘・魚崎
大塚合名会社醸

の婦人は平常とは異なる外装で出席したがる。マダムもその例外ではなく素顔で出席した。「出る」と「居る」ではすこし意味が違ってくる。この場合「居る」の方が優れていると思う。

マダムを揶揄しているのではなく、女性心理の一端をとらえた句である。

きさ子―PTAをとり上げた句はずいぶん、たくさんあると思います。しかし何となく句想がせまくPTAと母と服装について、マダムと素顔についての句が今までもあったように思いますが、この句はこれでこれなりの良さがあります。

幽谷―マダムというと先ず厚化粧に身を装うた夜の蝶という潜入感が誰にもある。このマダムがPTAに素顔で出席している深い訳があるのだ。

「お母ちゃん学校へ行くのだから他所のお母さんのようにしておいでよ」と子供の注文である。子供はマダムの生活態様を日頃それとなく十分観察しているのだ。ところがPTAに出席して見ると意外、誰も彼も紅を塗り着を着ている。子供のためによい母であろうと地味な姿でむしろ逆の状況で生地の顔がよく浮かび諷刺している。

水洞―PTAの会合には殆ど居る。句相これでいいと思うが最後の「居る」を「出る」としたらとも思

中 御 同
中 島 生 々 庵
若 本 多 久 志
松 江 梅 里
豊中市字服部五〇六松景園住宅七〇六
大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇

喜由―この句だけが整うているような気がする。評者同志の反ばつも今のところ見当らず平和に終りそうなのが何かものたりない。

川柳は良い材料を選んで構成さるべきで、材料が悪いといくら推敲しても時間の浪費となる場合がある。

水洞―幽谷氏の評の通りに解釈すると面白い句だが、それでは浅い句意になると思う。このマダムは本職ではなくて、本心は嫌やなのだがやむなく雇われているマダムだろう。マダム業が性に合っている女ならいくら可愛い子供の希望であっても、大勢が集まるPTAに素顔では出席しない。嫌らしい商売用ではないので身も心もつろいで出掛けたのだろう。「生地の顔」がそう語っている。

きさ子―皆様の想像力のたくましさには恐れ入ります。こうなっ

て参りますと一句たりともおろそかには出来ないかと痛感いたします。しかしこの句「PTA」と「マダム」と「生地の顔」と道具

立てが揃いすぎていわゆる標準型の川柳で難点もないかわりに、異色あるムードも特に感じません。

なおマダムと言えは厚化粧と決めてかかることも少し古くはないでしょうか、薄化粧や素顔の美しさをチャーンと心得ているマダムもいますし、いかに顔だけ生地のまま

でも髪かたち着物の着こなしにマダムタイプのあるものはかくし切れないでしょう。ただこの「生地の顔」をお化粧云々などに、営業用にあらぬ母親の顔という意味にとれば面白いと思えます。

幽谷―他人の句評は、その作句者に対する本当の評であれば悪くいおうが賞めようが、ああそうかとうなずいてもらえようが、作句者がそんな意味ではない、と言われた場合は何ら価値のない評、否評にも何にもなりたないであらう。評をする勇氣より人間一生学ぶべきことを忘れないことだろう。むしろ評に評が必要となるのではないか。

志度浦の海女

富士野鞍馬

謡曲「海士」(あま)は、藤原房前(ふささき)が、讃岐の志度の浦で、その母である海士の追善を営み、母の幽霊に逢って、父不比等との関係の物語りを聴くといふのである。

淡海公(不比等)の妹は、唐の高宗帝と国際結婚をした。それで三つの宝が贈られたが、その一つの明珠が志度浦で童宮に奪い取られた。不比等は愛人の海士に、それを取り戻してこいと命じた。海士は千尋の縄を腰につけ、利剣を抜き持って、海底の童宮へ沈んでいった。

童宮へよくは積って縄を下げ
悪竜の中へはだかの立ちすがた
童神はあわび取りだと油断する
玉取りは人魚のふりで油断させ

(拾四)
(万天三)
(タル一四二)

人魚だと思ひ童神出しぬかれ

海士よ玉よは童宮の合ことば

夜うちのやうに童宮は蚤と玉

河豚鱧鳥賊太刀の魚海士を追ひ

玉取りを追つ駈けて出る太刀の魚

玉取りは水を腹に逃げるなり

と川柳は、その海女の奮闘ぶりを作っている。

海女は、観音薩埵の合力を得て、明珠を取り戻したが、悪竜に襲われたので、乳の下を切って玉をかくして、ようやく浮び上り帰ったのである。

入れ所も有に乳の下やほな事

玉の門あるのに乳へおっかくし

玉の門あるのに乳の下を切り

(七五八)
(七五二、五六)
(七七七)
(一一二四)
(拾四)
(万安五)
(タル四五)
(タル三〇)
(七三三)

(タル三〇)
(七三三)

乳の下かへその下かと大巨きき

届かぬ迄も外科を呼ぶ志度の浦

乳と腹玉と達磨のかくし所

もと盗み物と悪竜あきらめる

などと、乳の下にかくしたこと

に川柳は興味をもっている。

腹へかくした達磨は、細川家火災の時、家臣大川友右衛門が、腹を切って宝物達磨の一軸を入れて守った「血達磨である。

取りかえず玉はこの世の置き土産

その海女の子が房前ということ

ついでに金比羅へと房前旅行

この志度浦で母の追善を営んだ房前は、ついでに金比羅大権現へも参詣したたろうと、想作されている。

後に近松門左衛門が、正徳元年(一七一)に、この謡曲「海士」を潤色して「大職冠」という戯曲を書いて、芝居になつて居る。それには、不比等がその父の鎌足になつていて、大ぶ筋もちがっている。

(七九六)
(万安六)
(タル一四一)
(七四六)
(拾四)
(万安五)
(七三三)
(七三三)

(七三三)

藤原鎌足は、逆賊蘇我入鹿を誅する手段として、唐人と結婚しようとした。唐朝は万古將軍に三種の宝珠を持たせて渡米したが、その宝珠を志度の浦で海中へ落した。鎌足は、家臣山上則風の妻満月という海女に、それを探索させたが、悪竜に害されて浮かび戻った。その時満月は妊娠していた。といふのである。

大職冠伽羅の油を買ってやり

鎌足へまっぱだかにていとまご

大職冠するりずるとたまをやり

腹帯をさせて鎌足わけをいひ

人圍のえさを沈める大職冠

などと、川柳もそれを詠んでいる。「大職冠」とは、後の正一位に相当する官位で、鎌足のことである。「伽羅の油」はピン付油で、油は水をはじくからと洒落たのである。

もともと宝玉を海へ落したとは、万古の謀略の嘘であつた。それを知つていて探索さ

せたのである。その訳を話して、満月の腹中の子を養うて鎌足の子にするといふ筋になつて居る。

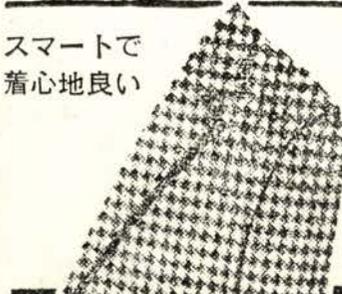
大職冠相如ほど世話をやき

趙の臣蘭相如は、連城の玉を持って秦に使したが、鎌足も宝玉に苦勞したといふのである。

この謡曲「海士」と戯曲の「大職冠」とが混同されがち

のようである。

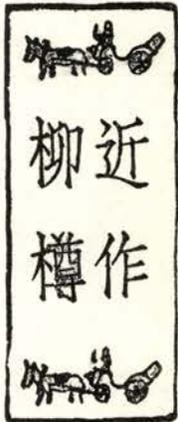
(七四六)
(七三三)
(七三三)



GOLDEN O.S.K.の 紳士服

各地特約店に有り

スマートで 着心地良い



麻生路郎選
北川春巢選

八ミリを向けられてから味が落ち青敷市 水谷 谷水
 無いことにされているは妻は知らず
 あくせくしなさんなど無職耐いでくれ
 さやあての一こまもあり老らくの
 媚態とはかくも淋しき中絶の
 耕耘機使う母なり嫁がない鳥取県 鈴木村諷子
 日曜というのに蚕眼をさまし
 善人に人を蹴つてもなりとうて
 テープレコーダー読経嫌の憎とち
 雨にもめげずなどと百姓おどられ
 若者がおらず御神輿飾るだけ今治市 越智 一水
 自由化がもう田へ麦をうえさせず 同

国会でわが一票は野次るだけ 同
 夜学生いたわるような月明り 同
 外出を体温計が承知せず岡山県 永宗 宗義
 親娘程違うと云えば例を引き 同
 鯉のぼり竿によりそい夕焼ける 同
 金持って来いと銀行ビルを建て 同
 ふり向けば都へ着いた能舞台京都府 小黒 王石
 手内職生き抜く子供がぐれ初め 同
 看護婦の度胸も知ったインターン 同
 みじめさをそのまま影がつゞ来る 同
 能楽「葵上」を觀賞して
 怨霊の出るとは源氏持てすぎる布勢市 古谷まさる
 簡素さの中に烈しい能舞台 同
 成仏を願う般若のフィナーレ 同
 御堂筋能のあゆみに似た女 同
 恋たのし清貧論もたのもしく西宮市 末沢 花美
 スタミナの不足義を見て目をつら 同
 自信満々素顔で逢いに行く 同

暑中御伺

秋 月 宏 方
和歌山市今福東ノ町二八

長 野 文 庫
今治市港町八丁目

長 野 井 蛙
山口県防府市大字西佐波
令字幸地一三一六ノ一六

米 沢 曉 明
愛媛県大洲市常盤町九一番地

東京都中野区鷺宮一ノ八四

阿部佐保蘭

名古屋市西区米田町一六
長谷川 鮮山
電話〇九〇四五番

那 谷 光 郎
加賀市大聖寺荒町四三

田 村 緑 朗
岡山県英田郡美作町湯郷五五一
号・藤波

中 村 九 呂 平
一杯水川柳会
下関市上新地町

横 柴 光
愛媛県西条郡壬生川町大
曲リ・富士紡水源池社宅



不倫の指組めば祈りの清らかさ	同	言い勝った筈にさっぱり気が晴	同
葬式は本宅二号のところで死に	竹原 愛鳩	旅帰り心ゆるめた子の寝息	同
未亡人の情事を女不潔がり	同	石炭の街から抜けていたわれ	同
沿道の若葉をバスがむしりとり	同	一等に乗って淋しい旅となり	新田 孝正
若き日の尊徳翁もナガラ族	同	ドック入り野望を捨てた訳でなし	同
子供の日子供も居ぬにすしを巻き	新田 桂仙	梅雨明けの感謝は襦袢よく乾き	同
教え子の大工で何もかもまかし	同	見下げてた猿まね俺もしてるなり	同
酔客へ握手も出来るバスガイド	同	スードスタジオほろ酔いの芸術家	香川 田中 彰
子の部下へ宜敷くたのむ親心	同	葬儀屋は予算通りの骨にする	同
吊り皮の手からロンジン顔を出し	大阪 山田 李鳥	詩人愛し風にも色をつけたがり	同
お手頃の値段と云うに方がつき	同	恋人とシヨパン聞く破目喫うば	同
点景に鹿はポーズをしてくれず	同	隣の子スルスル美女の型になり	青森 岩淵 一星
大鯛の処分神のみ知り給う	同	サポテンを愛し全治にまだ遠し	同
パラチオンの虚しさよ田螺 <small>さくら</small> 住 <small>ま</small>	加賀 木村 一路	先祖の田売って農業近代化	同
公約実行汚職道路が完成し	同	貧乏をくどかぬ後妻の手の温み	同
これが恋かな口笛が風に乗り	同	水盗み終えし小堀に手を洗う	仙台 平野 光道
アルバイト用のドレスが板に付き	同	農地法で奪われた田にビルが建ち	同
トイレから口三味線が戻って来	竹原 大洲 大八洲	台風を迎えに行ったような旅	同

<p>西尾 栞</p> <p>八尾市八尾木八七一</p>	<p>木村 匡利</p> <p>号 水洞</p> <p>匡余</p>	<p>川 雜 淀 川 支 部</p> <p>大阪市東淀川区十八条町一ノ二</p> <p>西 森 花 村</p> <p>坂田 東 洋 男</p> <p>志 水 礼 司</p> <p>早 川 清 生</p> <p>平 田 三 十 郎</p> <p>小 島 孝 夫</p> <p>中 村 瑞 歩</p> <p>木 村 水 洞</p>	<p>菊沢 小松園</p> <p>電話六六、六四四番</p> <p>局番変更</p> <p>西 川 晃</p> <p>大阪市西成区東入船町二</p> <p>大阪府阿倍野区王子町三ノ三四</p>
------------------------------	------------------------------------	---	--



見切品と書けば女がよってくる

同

面白いお方の連れは眼がすわり

津市 鳴野ひ呂し

胡瓜でも真直ぐいのが先に売れ

高知県 山川 勝子

酒癖の悪い上司に腕組まれ

同

孫連れてお宮の場に守頼み

同

福祉司の心を恩にして座り

同

日稼ぎの雨にあぶれて子を叱り

同

釘の位置変えて子供の室にする

青森県 五十嵐さか江

人間嫌い手の文鳥だけ信じ

香川県 三井 酔夢

嘘きいてやれば又来る女客

同

犬を飼いバラを愛するわがうれい

同

感情に蓋しなさいよ白い髪

パロアルト 斎藤 流路

自動車教習所入学

必死なるハンドルさばき豆だらけ

同

まじろぎも許さず愛の瞳の炎

同

帰郷

タクシーを待たせて蛇が通り過ぎ

秋方市 宮川 珠笑

腰の中見せてタイトにある若さ

大阪市 半田 夏生

満員へ化石の如く目を閉じる

同

悪筆をかばってくれた墨の色

同

もう我慢できんと酷使の胃が痛み

同

霧深しロープウェイで冷えただけ

同

哀しき自慢弟の地位が上

羽野市 古川 静波

長らえば交通事故が待っており

岡山県 秋野 萩路

新築の掃除余生の磨きかけ

同

楼門へ善男善女の雨宿り

同

ご近所にバレて療養落着けり

同

帽子掛社長のパナマだけかかり

大阪市 藤富 淀月

玄関へミシンの音が出迎える

見島市 伊丹柳瓢子

セロテープ紙幣の余命を伸ばす母

同

あごで人使うゴルフの玉飛ばす

同

郵便屋さんに済まない趣味の巾

竹原市 山内 静水

グループの記念アイロン贈られる

同

結論を急ごう腹中は読め

同

六法を頼る落目に初夏の風

同

六法を頼る落目に初夏の風

松江市 内藤 善夫

暑中御伺

川柳雑誌社阿倍野支部

事務所 阿倍野区松崎町3-10 (松江梅里方)

- 伊達 堰子
- 不二田 一三天
- 今西 生薑
- 本多 柳志
- 金井 文秋
- 加藤 繁雄
- 河井 庸佑
- 木村 十悟
- 菊沢 小松園
- 久米 奈良子
- 松江 梅里
- 宮尾 あつき
- 小川 恒明
- 新川 博也
- 辻川 喜仙

ABC順

交通局川柳会

- 北川 春巢
- 富岡 淡舟
- 浜畑 胡蝶
- 児島 与呂志
- 岡島 孤舟
- 米虫 一の字
- 草深 酔外
- 橋本 雅巢
- 小田 垣蝸牛
- 福島 正則
- 藤井 力泉
- 梅村 文洛
- 綿木 松亭



人様の選挙で隣と仲違い	同	錢湯のタオル乾いてから戻り	同
誘惑に負けたいよ <small>よ</small> キャンブの夜 <small>羽曳野市</small>	岡本紀太呂	ひらけてるつもり <small>の</small> 父をもてあ <small>ま</small> <small>岸和田市</small>	田端くにお
旅の恥かきたいような湯のムード	同	手術成功盲腸を見せてくれ	同
平凡な生活幸福そうに見え <small>松江市</small>	岡崎 雪美	女房の鞆に済まないとも思 <small>い</small> <small>大阪市</small>	川口 弘村
ライバルを向うに酒のまずいこと	同	禁煙をし <small>た</small> フィルター付き品切 <small>き</small>	同
齡の足笛で追われる交差点 <small>京都市</small>	大久保和三郎	文化とは寝 <small>て</small> いて飯を炊くことか <small>愛媛県</small>	村上 石峰
満場の瞳が弧を画 <small>が</small> く逆転打	同	季才もこうなるものか笛を吹き	同
敬遠をされて老い先案じられ <small>兵庫県</small>	斎藤たけの	お隣もゆっくり起きた母の日は <small>大阪市</small>	福富 隆子
合格に予備校メタル祝 <small>う</small> て来	同	病床の寝返り手伝 <small>う</small> 三四人	同
昼は寝て夜はネオンへ松葉杖 <small>高知市</small>	須藤 俊江	だんまりが一番先に結婚し <small>川崎市</small>	赤池 五郎
バーテンも喋りつかれて軍歌かけ	同	深呼吸俺は停年退職者	同
さすが志摩真珠駄菓子と並べられ <small>京都市</small>	都倉 来女	中年肥り顔も根生もえげつなし <small>大阪市</small>	柳生 野菜
手料理の多彩を謳 <small>う</small> ガスレンジ	同	ベストセラー儲かる術で儲けて居	同
青すだれ不貞の肌がす <small>い</small> て見え <small>玉島市</small>	井上 旭峯	起き直る気配おさえる見舞客 <small>九尾市</small>	平沢 <small>ゆずん</small>
民主主義明治の父を呆れさせ	同	スピードの時代明治は歩いて来 <small>堺市</small>	大谷 檜雄
子の居ない家らし狻に服を着せ <small>広島市</small>	上代 美文	梅雨のあけいいいな女の夏姿 <small>福島県</small>	住吉 貞坊
家計簿をつけても無駄が見つ <small>か</small> ず	同	相談という形式で酒になり <small>玉島市</small>	水粉 千翁
正直が除けものになる打合せ <small>石川県</small>	大山 雅城	方針は決ったBGの英会話 <small>大阪市</small>	西本 保夫

橋 本 緑 雨 大阪市東住吉区平野西之町八三	倉敷市水島寿町三丁目三一 田 垣 方 大 電話倉敷水島局七二〇八	浜田久米雄 勤先 国鉄岡山車掌区 住所 岡山市弓之町鉄道宿舍	丹波屋 戸倉普天 兵庫県水上郡水上町小野	虹川柳倶楽部 新 岡 回 天 子 電(唐津二七一八)	川 雑	玉 造 支 部 一同	丸 尾 潮 花 高槻市富田町七六七 日本住宅公団36号館 三〇四号
---------------------------	--	--------------------------------------	----------------------------	----------------------------------	-----	---------------	--



値上りの野菜日曜まめになり羽野市 三宅 ろ亭

見え透たうも云わせる夜のムード八尾市 宮西 弥生

顔顔に皺だけ ふえて無一物神戸市 宝田 蛙声

宣伝の巧さへ強精剤を買い島根県 松本 昌

折畳み梅雨も嬉しい晴れ雲り神戸市 吉田 隆史

老後の不遇涙もろさの日が続き和泉市 末田 晃康

十センチ足らずの鮎で解禁日出雲市 森山 壮

スモッグの空にとまどう鯉のほり大阪府 銭谷かをり

取れるだけ免状とってミスであり西宮市 鶴飼 鮎子

視界零汽笛は霧につきさささず今治市 八塚三五島

仕事から追いまくられるサロン宮崎市 野口卯之助

幸は里の母にもプレゼント大阪市 宮尾あいき

失恋の笑う余裕を取り戻し鳥取市 近藤 昭夫

ツイてない時は蠅さえ打ちそこね広島市 山本 定男

貧しさにうち勝つ作業着をたたむ兵庫県 常岡 孝風

長雨に若さ毎日もてあまし大阪府 石田 新石

叱られた昔は鐘へよく当り京都府 西村句楽坊

靴音で顔色かえる過去を持ち加賀市 亀田 六角

胃の悪いのがハリストで全快し八戸市 川村 映輝

現役を引いて閑取よくしゃべり羽曳野市 中川 利男

退職をすればあちこち痛むらし七尾市 松高 秀峰

小型車の乗り降りおかごと同じ形笠岡市 谷本鈍愚坊

湖へかすかに降った雨の音松江市 岡崎 祥月

パチンコに老若男女皆吸われ茨木市 高木繁太郎

現実へ夢もたびたびかえて生き石川県 南 伝一

女史と云う呼び名で皆にけむが大阪市 森川すみれ

母の日に我には贈る物がなく岡山県 梶川 信子

サラリーが足らん拜啓首相殿金沢市 根上 杏花

白髪になってからの着物がは徳島県 平田久美子

熟睡の土方のはだに蚊もあきれ大阪市 林 まもる

朝の訪問レジスタンスもなく語り神奈川県 富士 克巳

総理大臣殿と孫らも手紙かく京都市 田辺 嶋吉

休んでもいいのよとBG赤電話大阪市 小林 礼子

<p>暑中御伺</p> <p>菱田 満<small>秋</small></p> <p>名古屋市昭和区御器所町 一ノ五十一</p>	<p>隠岐 不酔</p> <p>姫路市茶屋町三六</p>	<p>林野 甦光</p> <p>呉市吉浦中町一丁目</p>	<p>山田 季賛</p> <p>山田 スミ子</p>	<p>大阪府高槻市西五百住三五ノ 四七幹線アパートB一〇二</p>	<p>南海電気鉄道株式会社</p> <p>川柳部一同</p>	<p>暑中御見舞</p> <p>吉田圭井堂</p>	<p>堺市浜寺昭和町一丁三〇番地</p> <p>〒③三〇五四番</p>
--	------------------------------	-------------------------------	----------------------------	---------------------------------------	--------------------------------	---------------------------	-------------------------------------

戦中戦後に

あなたは何を 喰べましたか

私達はあの頃の不自由な食生活を忘れることが出来
ない。八月十五日の戦争記念日を前にして本稿
を世におくる—

(編集局)

毒にならぬものは

みな食べた

京都 大鶴 喜由

お百姓の部落に住んでいて尚且つ食料の入手が困難だった。その頃から白髪が出来かけ、目がかすんで来たと思う。その頃の旬に、糧続く日のうららかなるこ

とよがある。私は毒にならぬものは皆喰べた。

芋の茎。油でいためる。

南瓜の葉。油でいためる。

フスマ(小麦の外皮)練って油でいためる。

タンポポの葉。ゆでてたべる。寒梅の澱粉。お湯で団子にして焼く。

大豆。いって米と共におかゆに

する。

バカ貝。池から採って来てゆで

る。

食用蛙。池で釣って来てゆで

る。

台湾ドジョウ。池で釣って来て

焼く。

ヒマシ油。油の代用で玉ねぎを

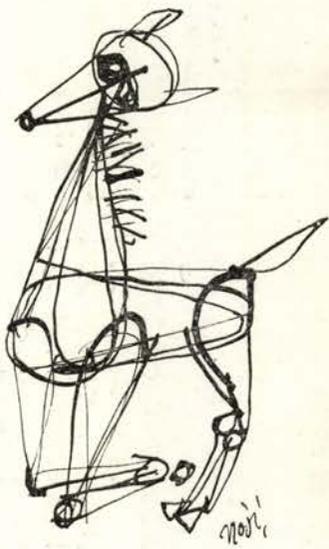
いためる。

ドブ。密造しているところから

買う。

苦味チンキ。橙皮チンキ。二十倍にお湯でうすめて酒の代用とする。

きび。米と共にたく。



と醬油があれば今でも一週間や二週間は暮せる自信がある。

酒を食った男

青森 工藤 甲吉

私は酒飲みである。いまは、さほどでもない(自分ではそう思っている)が、戦中から戦後にかけての頃は、年令も年令だけにずいぶん飲んだ。したがって、酒の統制下であって酒の入手には、ひとかたならぬ苦労をしたものであった。幸い、友だちが造り酒屋だったので大いに助かったものの、それでもやはり思うようにはゆかなかった。あの手この手で税務署の役人や県庁の役人をだましても、特配には限度があったし、心ならずも? 濁酒まで飲んだ。ところ

である日、やはり酒好きのKから連絡があり、さっそくはせ参じたところ、いわずと知れた吟醸が出た。Kは自ら濁酒屋の名杜氏をもって任ずる男。それだけに数々の特級酒を出しては仲間からカッサイを博していたのであるが、この日の吟醸、どうしたものか、アルコールの含有量は申し分ないのだが、仕込みのさい、水の量を間違えたらしく固目のおカユみたい。そこで私は彼は一策(策というものでもないが……)を案じ、それを茶碗に盛り込み、箸で食べたのである。そうして結構いい気分になったのであるが、いま考えてみて「酒を食った」という人が、果たして、全国広しといえど他にあるかどうか。こんどのアンケートでも恐らくはないのではないかと思ふのである。なお、そのとき、その酒に私が命名した「大東亜酒」が、濁酒の愛称となつて広く県下を席巻したこともいまは一つの物語である。

芋芋芋が続く

大阪 水谷 竹荘

戦時中は一坪農園時代、戦後は闇市、買い出し時代だった。戦時中は配給だけでは食って行けないので、どこの家でも一寸した空地を耕しては一坪農園を作り自給自足したものである。そして茄子、大根、豆類、芋、胡瓜、トマト、南

た。Kは自ら濁酒屋の名杜氏をもって任ずる男。それだけに数々の特級酒を出しては仲間からカッサイを博していたのであるが、この日の吟醸、どうしたものか、アルコールの含有量は申し分ないのだが、仕込みのさい、水の量を間違えたらしく固目のおカユみたい。そこで私は彼は一策(策というものでもないが……)を案じ、それを茶碗に盛り込み、箸で食べたのである。そうして結構いい気分になったのであるが、いま考えてみて「酒を食った」という人が、果たして、全国広しといえど他にあるかどうか。こんどのアンケートでも恐らくはないのではないかと思ふのである。なお、そのとき、その酒に私が命名した「大東亜酒」が、濁酒の愛称となつて広く県下を席巻したこともいまは一つの物語である。

暑中御伺

岩崎 愛 二

京都府乙訓郡長岡町
梅ヶ丘二丁目三十八番地
電話京都九二局・二九七四番

石居 高 志

東京都小平市美園町
二八三番地

さんばつは
何はともあれ
男前
(南柳)

男 ま え

大阪市阿倍野区
天王寺町北一ノ十八
(省線寺田町裏駅南一丁)
TEL (調) 6287

瓜等、それぞれ好みの苗を植えたものである。僕も芋が好きだったから病院の広い空地を耕して芋をよく作った。米の不足な時代、芋が一番重宝がられたものである。特に看護婦さんも芋が好きだったから、病院でも、家庭でも、色々な芋料理を作って喜ばれた。代用食として芋団子、芋のきんとん、芋のサラダ、芋のカラ揚げ、むし芋等々、芋づくしの食生活を送ったが、すこしも苦にならなかつたのは、やはり芋好きのおかげであつた。その当時、漫才で芋の話をして笑わすのが流行したなかにこんなのがあつた。

あべの附近で毎晩焼芋の香りがするのを調べてみたら、芋腹で死んだ人の火葬の煙だつたとか、たまたま米の弁当を持て行つたら、箸を忘れた。それは弁当の方が多いからとか、おにぎりは、おやつの特ですなんて笑わしたものだ。

新聞の上だけ配給案になりこんな句を作つた時代、戦後闇市盛んな頃ともなる、新聞に発表された通りの配給はなくて、いつもぬか喜びに終り、配給だけ暮らしていると栄養失調で死亡する人もある時代になつたので、僕も負けずによく買出しに行つた。食堂の仕事をしていると、色々情報が入ると、玉子は静岡、乾物は姫路、魚は白浜三重等々、大阪附近の海や山や村へと満員の汽車にゆられながら出掛けたものであ

る。

そして
温泉へ闇取引が靴をぬぎの匂が生まれたのである。こんな苦労をせねばうまいものがたべられなかつた時に、闇市へ行くとなんでもあつた。真白い飯（銀飯）のライスカレーが十五円で行列を作つていた。僕もよくその行列の中へ並んだものである。食うだけの心配はない闇屋です

その頃のこん立

今治 渡辺 曉 童

1 食わなかつた鉄砲玉

関特演の名のもとに昭和十六年夏、故虻の鷹、何毛子、妻、長男（三才）だけにひそやかに松山を送られて以来、二等兵生活の悲哀。睡眠不足と空腹は満四ヶ年の内千四百日位は一日として忘れたことはありません。

凍ては馬糞につもつた雪さえ砂糖をまがした芋だんごを連想するといったあさましさでした。創意工夫を生かして食えるものはと鶴の目鷹の目でしたが、何分零下四十度厳寒不毛の満洲最東端、でも在満三ヶ年半敵の玉だけは一発も食いませんでした。

高知で終戦、解除、馴染みになつた故谷脇素文画伯に見送られてそれこそ文なしの「父帰る」の図

でした。

2 芳醇な地酒

農薬を探す神農よろしく木の実、草の芽を求めて春山のしげみにわけ入つてとたん、そこには酒造りの道具一式、しかも芳醇な密造酒と呼びたくない酒の樽、おそるおそるチビリとやる。これはいけると少々御馳走になる。翌日兵隊もどりの五合入りの水筒持参した時にはあとかたもなく完全撤去し残念でした。

3 食用蛙料理

小さな溜池に食用蛙と殿様蛙の混血、同じ場所へ出てくる彼等の習性を研究しまして馴れぬ手に金つきを斜にかまえて待機半刻、やつと一匹を二人がかりでしとめ漁師の子供の応援で二匹、合計三匹鶏肉と兎肉をミックスしたようなやつ砂糖抜きすき焼！ たまたまなかつたですぞ、その後は遂に私達の槍先にはかかりませんでしたこれは今でも本職が取りに来て高級料理になっているそうです。

4 その他のこん立

取りたてのわらび、しやぎむき一握、塩若干、溜め池の水飯盒一ぱいの雑炊。種いも、南瓜、麦がゆ、いもだんご、食塩汁。
米塩の恩しみじみと世の移り

曉 童

土を喰う

大阪 唐崎 專 翁

十億のアジヤ導く日章旗
威勢の良かった東亜戦当初に引換へ、世界の大半を敵に廻しての苦戦惨憺、戦線の防備と食糧確保の必要上、銃後の物資欠乏と食料難は、益々深刻窮屈となる。平常なら畑の堆肥に捨てた芋蔓が、全国民に配給された位だから、万事推して知るべしであらう。栄養失調や餓死者も続出した。
闇知らぬ律気に酬ゆ餓死自滅
横着の方え廻って生き抜ける

私は性来蒲柳と胃弱症で青年時代から禁酒禁煙を実行して来た位だから、食料不足にも案外耐久力があつた。また当時、年来の自家製品が軍需となり、海軍監督工場として伴の社長以下三百余名の工員と共に、戦地同様の不休活躍りであったが、忘れもしないのは製品の乾パンや干菓子に、白土粉末を混合するべく指示されたことである。尤も当時は山野草木も野獣も漁り尽され、家畜の犬猫や鼠でさえ少なくなった時代である。が、まさか人間が、土まで喰うとは意外であつた、
戦争は頭の上に来て終い
日夜空襲で防空壕に待避しつつもどくもどく
土竜が蚯蚓となつて土を食

土混りの乾パンを噛つて空腹を満した。酒類も陶酔（酒精）度の薄い錦魚酒が横行し、強度の酒精

暑中お伺

石倉 旅 風
大阪市西成区松通二丁目八

唐崎 專 翁
大阪市住吉区帝塚山東二
電 0四二一番

室 井 巖
号八九寸

奥津 啓 一 朗

橘高薫風子

八木 摩 天 郎
八木 徳 子
堺市九間町東二丁目九
電 堺 0七二三五番

富柳 会 太

阿倍 柳

富柳 会 郎

川 維 大聖 寺 支 部
加賀市大聖寺永町
野村味平方

代用に苦味チンキを飲用する人もあった。味は局方酒精に橙皮を浸出した健胃劑で、味は苦くとも無害であるが、劑には局方酒精（エチール）を工業用メチールと間違えて飲用し、中毒死する悲劇さえ続出した。器用な人は家庭で濁酒を密造したり、局方酒精に香味を混和したインスタント・ウイスキーを調合飲用する人も殖えた。当局が日本酒類を檢討科学し合成酒に乗出したのも其頃である。

酒精度で緑酒のムードぶち壊し

私は当時大阪香料施設組合の理事を担任していた関係上、酒類調合と香味に就て、各所から照合あり多忙を極めた。此の合成酒は酒精に蛋白と香味を加えたものだが、醸造清酒のように飲み過ぎて大脳を刺戟し、二日酔を起すようなフーズルが含まないから、反って安全無害といえよう。

あの頃の

たべもの

新潟県 高野むじな

米どころの農家だった為、記録に残す程の不自由はしなかった様です。強制執行と言って倉の中迄検査して全部米は供出し、配給を受けて喰った事もあり、お粥をたべる申し合わせをして、各戸に食事時に見て廻る様な事もあったけれども、生産者の強みは、どん

なにしても自分の分は確保する事が生きる為の努力であった。

しかし昭和十九年九月から二十年八月迄の一ヶ年間丁度中学三年だった我々迄学徒動員で新潟市の鉄工場へ行って働かされたので、その間の食事はやはり今も忘れないものである。豆をませたもの、うどん、甘藷、馬鈴薯をませた飯から玄米食、もち米食等だったから質の上では当時としては無理もいえない事かも知れないが量の少ないのは本当に困ったものでした。当時十四、五才食べたい盛り

の所へ一日三合いくらと言っていたが弁当をつめて貰っても振って片すみに寄せると四、五センチ位になってしまいう位、小さなおかず入れにぎっしりつめると入る位しかなかったのです。朝食を食べて部屋へ来ると弁当を開いて食べてしまう。それでも満腹した気持には程遠い有様で七時三十分から五時迄九時間半の重労働、大ハンマーをふったり電柱立てをやったりだったから、夕食には目が廻わる程になってしまふのだった。それでも一時のわずかな満足感を得る為には朝二食食べる人が多く大分注意されたものでした。

いもめしの時等弁当の中は石垣の様にいもといもを米がつないでいる位で、いもを一つとれば底が見えてしまふのでした。

そんな食事だったので勉強する気もなく考える事はいかにして食事をごまかすかで部屋中が一つの

目的に知恵をしばったものです。盗みに入る様な事はしなかったが病人の分をおかゆを貰ってごまかしたり、あの手この手を使い、今も同級生が会えば当時の思い出に花が咲きます。

めしと心中

した話

諫早 川岡 靈眼子

私のあの頃の住居は東淀川の柴島にあった。私のビジネスが中之島の合田ビル、南に住友の本社、土佐堀川を挟んだ北側の日本銀行のそばにあった。午前九時から午後五時まで執務時間、昼めしは朝日ビル食堂、昼めしといっても田舎精進物に等しいワラビによく似たゼンマイ料理や靴の原料になる豚の皮焼など……米食なんか見ようとしてもない。たまたま今日はご飯物らしいと註文したら手のひら一ぱい位ポコンと盛って置いたような米一粒もない全麦の味つけハイライこれでも喜んでおののくスプウンで皿を鳴らしたものだ。

音を立て

これも一杯切りの条件つきこの条件つきはこれが大衆サービスの店舗でございませよとの信用政策とか。……こんなものでおなかが一ぱいになるわけがないので次の店そしてまた次の店にと食道巡歴

を重ねているうち退社時刻が来てしまふ。家に辿りついた時はもう空の腹がグクグク音を立てて鳴るといふ始末だ。私が大阪にいた記憶で昭和十六年の終り頃からは私の家の食糧難は特にひどかった。子供はやせていた。

致し方ないので九州の熊本県阿蘇の親戚の農家に「メシガホシイオハコビコウ」の電報を打った。そしたらその翌々日徹夜して切符を買って乗ったという汽車でリュックサックを大きく背負って親戚の叔父が巻ゲートルでやって来た開かれたリュックサックからは新聞や木の皮で包み込まれた数知れぬ握り固められた三角や丸の銀めした。中には小豆入りの赤飯や特産の柿の味噌漬などがぎっしり……これは米の儘で運ぶのは制限されているため製品のおむすびにして持参したものだと説明された

温い心ではこぶおひやめし長く主食米にあこがれていた私達夫妻も子供達の歓声の中に混って本当に久方振り米の味、めしといふものの味を深く深く噛みしめた。それこそ一粒のめしつづも拾い喰いして、

て居

こぼれたるめし一粒が光って居 運んで下さった田舎の叔父は「帰ればウンと家で食べられるから」と一つのお握りも喰わずお茶一杯のんで一時間もいることなく運ばれためしの米代より遙かに高い往復の汽車賃を支払って、から

川柳並木会一同 代表 木山 遠二 岡山県笠岡市山口		川柳雑誌社鳥取支部		傍島 静馬 神戸市東灘区本山町森三九八	
北村 三步	岡崎 芳道	福田 多可志	森田 茗人	杉谷 湖山	増田 耕民
大西 八歩	河村 日満	大西 八歩	河村 日満	増田 耕民	岸和田市上町三六
高橋 操子	電話岸和田貝家②六六三一	内藤 さき子	電話岸和田貝家②八〇七九	岸和田市野田町一七五	下関市東大坪四町十八ノ十一
桜川 不水	代表 山内 静水 広島県竹原市	竹原川柳会一同	代表 山内 静水 広島県竹原市	佐野 白水 電話局番変更 大阪六三二局一、一六九	帝化川柳会一同

になつたリユックサクを背負つて直ぐにまた、はるばる九州の熊本の中に折返し帰つて行った。以上が私の戦時中の食物である。

豆腐の主食

大阪 北川 春巢

昭和二十年八月十五日、終戦の日を、私は山口県の山陰線沿い入丸という駅のある、湯谷町といふいなかの海岸近い所で迎えた。召集を受けて軍医見習士官となり、敵の湯谷湾上陸阻止を目的とする部隊の大隊付軍医として勤務していた。当時の日記を出して見ると次のように認めてある……

十五日、昭和十六年十二月八日、あの大東亜戦の初めの折と似て非な感激の日。あの折と同じラジオが、同じ電波がよくもまアこんなことを言えたものだ。ラジオをなぐりつけた。何でも破壊したい感じだ。

連隊本部医務室で診断をはじめる前寝ころんでいてと衛生兵達の話に、ラジオで日本軍の降伏を報じたという。高級医官殿(註、軍医大尉)は怒ってそんなデマは口にすると叱つてをられた。然しデマにしては少し念が入つてゐるとも思へるし、まんざら嘘でもなささうだ。十四時半から診断をして十七時半に至つたが、宿舎への帰

途も町の人々が自転車走で走つてゐる様子も普通と違ふ。帰つて来て江原さんで風呂を頂き(註、見習士官以下兵隊は営内居住のため国民学校に宿泊してゐて、入浴は民家へ行ってゐた。)お盆のご馳走を食べながらこの耳で聞いたラジオは、間違ひもなく停戦の詔勅だった。聞きながら涙がポロポロとこぼれて仕方がなかった。停戦に至つたいきさつを、その後放送してゐた様子だったが、もう聞くに堪えず、腰を上げて学校へ帰つて来る。

あれほど一億国民が忍び難きを忍んで戦つて来た戦争も、ただだ勝たんがためであつたが、それがこんな結果にならうとは。もちろん御前会議も行はれ、すべては考へ尽くされてこの発表である。自分が何をか言はんやであるが、過去を思ひ将来を思ふと、万感胸に迫るものがある。夜も地方患者を往診して十時に就床したが、中々寝つかれぬ。何を考へても頭の中に色々の雑念が浮んで来る。十一を聞き、十二を聞き、とうとう学校の時計の一時を聞いた。……(かなない原文のまま)

十六日、もうもう気合が抜けて何をやる元氣もなく、医務室でゴロゴロしてゐる。午後、待兼ねた新聞が来たが大きな見出しで大東亜戦の終局を報じ、畏き御詔書が載つて

ゐる。読んでゐるうちに、又も涙がポロポロと出て来た。新聞にはカラ元気やうな記事が出てゐるが、考へて見るのに将来の希望はどこにも見出されはしない。どんなふうになつて行くのかは、自分の頭には到底わからない。

日記は十六日で切れて後は白紙。次は九月五日に隊が広島島の海田市へ帰る日からまた書き継がれている。いかに心の中が虚脱状態であつたかが、今でも分る気がする。

所でいま問題の食べ物のごとであるが、日記に書いてあるわけではないが、思い出すのは米がなくなつて主食代りに豆腐を食べたことがある。後になつて聞く所によると、部隊によつては食にこと欠かなかつた部隊もあつたようでそんな話を聞くと現在でも腹が立つてしょうがない。食べ物の怨みはいかに深いかが思い知らされるのである。私達の部隊には米が少なく、代用食として大豆が配給されてゐた。初めは米の中へ大豆を混ぜて食べさせていたが、ピロウな話ながら、学校の便所へ行くと、大豆は消化もされず、つぶされてせず、そのまま大便になつて出てゐるのである。これは兵隊達の嘔まずにのみ込む早めし食いの結果であろうが、これではいかぬと私は考へた。私自身は、地方には医者がいないし薬もなく、私達の部隊には薬もたくさんあるし、部隊

長の命令で地方人を診察しろ、というところで、診察をするとその家でこ馳走になつたり、また色々の差し入れ品などもあつて食事には大して不自由はしてゐなかつた。だが多数の兵隊はこんなわけには行かない。経理部と相談をして、反対もないわけではなかつたが、大豆飯は食べさせぬことにした。副食の方は、幸い海岸の近くであるから魚類には恵まれていた。米が足らなくなり、大豆が余つて来るのは当然の結果である。戦争中はそれでも何とか本部へ無理を言つてやりくりして来たが、敗戦になるや否や、米の入つて来るのは全く思うに任せぬ状態となつてしまつた。

そこで一計を案じて、町の豆腐屋に頼み大豆を提供して豆腐を作つてもらい、一日に一食は米飯無しで豆腐を主食とすることにしたのである。豆腐屋の方は商売用の大豆が手に入らぬので閉店休業の状態だつたから、渡りに舟と二つ返事で承知してくれた。一人宛四丁だか五丁だか忘れしたが、ともかく豆腐ならば栄養は充分だし、消化も悪くはない。これを何日間か続けたが、これで節米にはなるし、大豆のストックもはけて来たのである。

私ももともと豆腐は好きな方で、湯豆腐で一パイとか冷奴で一パイ、などというのは前からよくやつたものである。所が、所がある。冷奴を四丁も五丁も一度に

山内 静水

川柳米子支部松露川柳会

小西 雄々

米子市富士見町一三五小西方

川柳 玉造支部

西田 柳宏子

牛島 水京

城 一舟

支 部

松川 杜的
植村 客遊
阿万 永断的
永尾 永断的
大塚 秋石
保塚 岳詩
塚脇 笑太
都原 紅月
吉原 初費
山野 季甫
山口 生費
宮口 季生
辻白 溪客
正本 水客

富柳会 一同

富田林市公民館内

川柳雜誌社

木次支部

魚住 満潮

大阪市西成区玉出本通四ノ六

食べさせられると、口にはおいしい
 くて食べる時にはまだまだほしい
 ぐらいたが、後になって腹の減ら
 んの困ったのである。丁度牛肉
 のすき焼を二人前も三人前もを
 ときに食べた時の後のようにあ
 った。何時間経っても、いくら腹減
 らしの運動をやっても腹が減って
 くれないのである。大豆が畑の牛
 肉と言われるゆえんであろう。私
 は小食の方で、兵隊のお腹とは違
 うかも知れぬが、昼食に食べた豆
 腐のおかげで、とうとう晩めしが
 食べられない破目になってしまっ
 た。私は豆腐の昼食は一日だけ
 ご免をこらむことにした。ま
 軍隊の将校というものは、そんな
 我が儘もできたものである。兵隊
 には毎日食べさせておきな
 ら……。

その後これにこりて、この頃で
 は湯豆腐や冷奴で一パイ、の時に
 は、豆腐一丁しか食べないこと
 している。そして豆腐を食べる度
 びにある時のことを必ず思い出す
 のである。

潰しの銀飯

其他

兵庫 戸倉 普天

当時帰農しておった私は「飯米
 百姓」を自営しておったので、一
 日二合三勺（最高二合七勺）の配
 給米で生き抜かれた方々に比べれ
 ば慥に余裕のある生活であったと
 思うのである。

然し保有米にもきびしい限度が
 あったのみならず、「一升飯」に

慣れた百姓稼ぎ人には、定められ
 た一日量の三合五勺では拡大した
 胃袋を養うに足らなかつたし、加
 之都会から頻米する「飯喰い客」
 を満腹せしむるに足らなかつた等
 で、否応なしに日常の代用食を採
 らざるを得ない窮地におち入った
 のであった。

以下私を含めた当地方農家一般
 の非常時代用食の主たるものを想
 い起こして、当時の想い出を新た
 にし度いと思う。

(一) 潰しの麦飯 米半分麦半
 分の麦飯を半白（はんぱく）と謂
 う。而も白米は半搗米、麦は丸粒
 のままエバ（煮て膨らした麦）し
 たものであったから、飯の色は薄
 墨の如く、舌ザワリは「砂を噛む
 に似たり」であった。十分に精白
 した押麦（圧搾麦）を僅か一割乃
 至二割を混ぜた麦飯さえ貧乏人の
 喰べるものとして忌み嫌う今日此
 頃から見れば「半白麦飯」なぞ聞
 くだけで身の毛の立つ思いがす
 る。

(二) 潰しの銀飯 純精白米飯
 を「銀飯」と呼んで珍重したので
 あったが、追々「七分搗き」から
 「半搗き」となりやがて「玄米
 飯」を常用するに至って「潰しの
 銀飯」などと洒落るものもあっ
 た。しかも此の「潰しの銀飯」さ
 え大阪へ出る場合の弁当飯だけに用
 いられたのを想い出すのである。
 塩を十分に利かせた握り飯を更に
 焼き飯にして夜行列車の翌くる日
 の昼弁当に携えた事なぞ念入りの
 ナンセンスであった。

(三) 豆粕飯、油粕飯、肥料の
 豆粕、油粕を粉にして米飯に混ぜ

て喰べたり、自家用醬油の絞り粕
 が飛ぶ様に貰われて行き、米糠や
 フスマ（麦糠）などの鶏の飼料が
 食用に代って行ったのも独り農家
 だけではなかつた様である。

(四) 南瓜飯 甘藷や馬鈴薯が
 主食に用いられたのに不思議はな
 いが、南瓜（かぼちゃ）を主食に
 用いた事もあつた。室外イグる事
 を知つたのであつた。

(五) りょうぶ飯、すいすい飯
 山野に自生する小喬木であつて、
 各其若葉を茹でて、御飯に混ぜて
 煮くのであつた。江戸時代の飢饉
 年には豊山村の救凶食物として用
 いられた記録がある。其の味付け
 加減に依つては、可なりにイケル
 ものであつた。

(六) 蕪飴、蕪を煮詰めて「モ
 ヤシ」を加え、之を醗酵させて作
 るのであるから多くの手間と長い
 時間を要するのであつた。然し砂
 糖不足を補うに重宝であつたから
 劣を厭わず之れを造つたのであ
 った。之れが後には「飴のキャンデ
 ー」に進化して子供用飴菓子とし
 て売り出される様になり、やがて
 村中の婦女連の内職稼ぎととな
 り、思ひも寄らぬポロ儲けが続い
 たのであつた。今は蕪飴など喰べ
 る子供もないであらう。

甘党の私は甘味不足に困つて砂
 糖や砂糖大根も試作したが、其
 の茎や大根をしがんたりしゃぶつ
 たりして、砂糖に搾り上げるまで
 待つておれなかつたのを想い出す
 のである。

七、黒い塩。褐色の苦塩、海無
 き国の丹波では食塩不足には困り

抜いた。工業用岩塩や、肥料用苦
 塩（にがり）が漬物に用いられる
 様になって、初めて黒い塩、茶褐
 色の塩を知つたのであつた。

(八) どぶろく、農家の酒不足
 を補うにどぶろくの密造が流行し
 た。「金魚の泳ぐ酒」に比べて其
 の酔機嫌は特に百二十倍と唄われ
 たのであつた。然し天井の隅や奥
 の床下で醗酵すると、ぶろくや奥
 ざこれ堆肥小屋に移して其の筋
 の検査を免れた利口者もあつたの
 は笑い草である。又どぶろく密造
 の検査に来て、却つて其の風味を
 褒めて帰つたなどとの「造り譚」
 を流布する者もあつて噂の種はつ
 きなかつたのである。

(九) いたどり煙草、山野に自
 生する多年生の草本、いたどりの
 葉や細い茎を乾燥して細く刻んで
 喫うたのである。刻み煙草に混ぜ
 て喫えば尚更の味があつたのであ
 る。

(十) 其他 甘藷の蔓や葉は
 煮物として喰べたが、其の代りに
 飼牛が瘦せたとの話があつた。馬
 鈴薯を新香型に切つて浅塩漬とし
 たが沢庵漬の「コーゴ」には及ば
 なかつた。南瓜の蔓や葉を煮物と
 したが頂くに足らなかつた。路傍
 に自生する秋の彼岸花（曼珠沙華）
 の球根は粘り気が強かつた。オガ
 タス（鋸屑）飯を喰べたがこれは
 猟奇趣味に属するものであらう。

當時を穿つた川柳に
 靴から土産ではなし米二合
 風呂敷に包めば米もあわれ
 なり
 普天

正直にしとれば米も炭もな
 し
 同

高 峰 柳 児 長野県須坂市太子町	渡 辺 暁 童 愛媛県越智郡吉海町仁江	岡 山 村 千 客 岡山県倉敷市新川町千老番地	工 藤 甲 吉 青森市長島三ノ二 東奥日報社編集局内	友 淵 貴 山 大阪府泉北郡高石町北五〇六	金 泉 万 楽 大阪市東淀川区淡路 本町二ノ六八九	福 田 丁 路 高槻市米室六九二ノ四	久 家 代 仕 男 島根県平田市灘分町一八二二	大阪通信病院 大阪 辻川柳会	金 長 足立春雄 若林草右 樹本露児 市場没草右 田中敏行 西辻竹青 中谷ハナ子 西口竹志 水谷竹莊 古谷まさる 木村よしを 重田安紀子 生越正徳 北川春巢 銭谷かおり 半田夏生 小沢史葉 堀風仙洞 森下愛論 橋本幸男
----------------------	------------------------	----------------------------	----------------------------------	--------------------------	---------------------------------	-----------------------	----------------------------	-------------------	---

川柳まつり

先見の明へアハハと社長なり

川柳阿野野支部 本多 柳志

大風呂敷をけなした路がせまくなり

川柳本社 本田恵二朗

買占めた草ぼうぼうがはねあがり

川柳倉敷支部 水谷 谷水

先見もヒスには腕をくむばかり

川柳本社 石居 高志

先見の明やっばり社長だと思ひ

川柳堺支部 八木摩太郎

先見の明を隠せる除幕の日

川柳大聖寺支部 杉浦 酔羊

三顧の礼いん艷に魚を釣り

川柳大聖寺支部 野村 味平

先見の偉さは祖父が杉林

川柳淀川支部 中村 瑞歩

先見も気象の異変までよめず

川柳本社 石倉 旅風

先見の方と運とが行き違い

川柳阿野野支部 伊集院 良

嘲罵した口で先見の明はめる

川柳浜寺支部 吉田圭井堂

百年の計凡俗にさえ切られ

竹原市 大洲大八洲

先見を常識論にさげすまれ

川柳玉造支部 平井 井平

先見はあれど資金のない辛さ

竹原市 杉原 愛鳩

先見は誤算子供が多すぎた

川柳明支部 直原七面山

叔母さんのいつてたとおり別れ

川柳松支部 小林孤呂二

先見の明ある妻のいて呉れる

川柳倉敷支部 用垣 方大

あんさんは社長になるといふやろ

川柳本社 西尾 栄

先見のあやしくなった十二月

選後に

路郎

★特別課題の応募は年毎に激増して十回目の本年は特に沢山集まった。★私の誕生日を祝して下さる意味で、川柳川柳まつりが企画され、予定の十回が終了したわけだ。★まあ、十回も誕生祝をしていれば、そのうちには、何んとかなるだろうと考え、嫌のウラに影ひ込む優勝者も十名分の区画しか頼んでない。★そこでこれからどうするかは最後まで生き抜いて来た私と、企画者の生々麻氏等の協議によって決定されたことだろうか、ここで穿穴く川柳川柳まつりに終止符を打つて無限の機へ持ちこむのも一つの方法ではないかと思

受賞がけぬ思

備前支部 森本正州

写真説明一前列正州氏中列向つて左から支部長東岸氏(幅)・竜泉氏・一戸氏・宗義氏・芳月氏・後列久米雄氏



第十回川柳川柳まつりには備前支部からみんまで出席しようとは昨年末から計画していたので出席する以上なんとか作句も頑張ったと思っていた。私も備前支部創立

先生の発表があった折一句でも人選すればと思っていた所全く思いもかけぬ第一席入賞と聞いたそのとたん雲の上に引き上げられた様な気持になり賞状を受けに出た

当時から数える川柳歴は十五年になる毎年かかさず「川柳まつり」の特別課題吟には投句をつづけて来たが細々と続けて来た私の川柳歴に一べんに陽が当たった感じである。特別課題「先見」の路郎

足がふふわとして家に帰った今も尚その感激に酔っている様で全く夢の中の事の様だ。その日の夜行で家に帰り女房に賞品を見せても全く信用しない。やっと賞状を見せて納得させたのである。

立にと思う親ごころまでにじみ出ていることもうかがえる。第二席・今西生薑氏の「先見の明が孤独な人にする」は先見の明のある人が恒に大衆に容れられないのは当然。第三席・杉谷湖山氏の「先見が国を動かす子に育て」は子を見ること親にしからずか。一面の真理を穿った句。その他、味うべき句の多うかつたことをつけ加えておく。

本年四月長女が新制中学した。中学に入ると次は高校、親の気持ちでは三年位すくたつ、高校入学も仲々むつかしい世の中だ。若しも「先生にあつさり私立すすめられ」る様な事になつては苦しい、そこでそんな事のないように長女を激励している訳です。子供の方は案外平気なのですが親の気持ちは仲々です。私の生活の中から生れたこの句が栄ある路郎賞獲得の一席入選をしようとは思ひもかけぬ事であつた訳です。欲のなかつた事が栄冠を得た原因であつたかも知れません。備前支部には麻生路郎先生もたびたび見えて御指導をいただいております。先生は皆乃先生の御魂を見守っていて下さる。藤乃先生やその他先輩も度々来ていただいている。一席の賞の感激もさること乍ら懐しい。諸先輩に大会席上でお目にかかれた感激も大きい。川柳に依つて人間修養に更に邁進したいと念願をあらたにしていきます。今後共柳人各位の御鞭撻をお願いします。御多幸と川柳雑誌社の御繁栄を心よりお祈り申し上げる次第であります。

大阪市南区二井戸町二三 山川阿茶

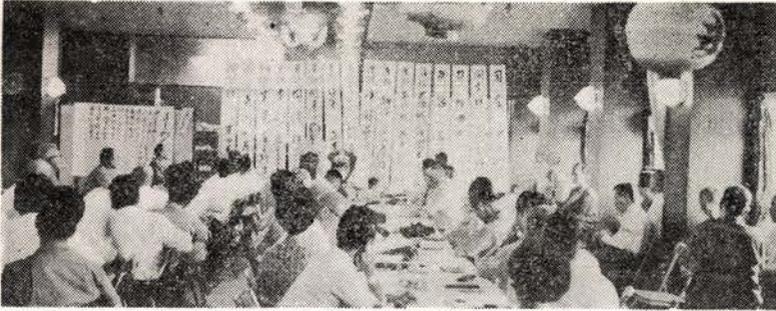
川柳婦人会連絡事務所

- 麻生 阿茶 乃
- 山島 小石
- 太田 良子
- 高橋 操子
- 西田 清栄
- 酒田 清子
- 藤村 清子
- 内藤 清子
- 小西 富士子
- 八木 徳子
- 市場 カネ子
- 吉川 悦子
- 沢田 美喜子
- 久米 奈良子
- 置田 花子
- 藤岡 花子
- 内藤 白子
- 西出 由美子
- 西川 由美子
- 中村 春子
- 林村 春子
- 西村 梨子
- 酒田 章子
- 宮尾 美子
- 岩田 美子
- 須藤 俊子
- 上田 政子
- 上田 美子
- 山田 豊子
- 鳥取 周子
- 天正 美子
- 三井 醉子
- 見玉 夢子
- 武居 寿美子

1963年度の

路郎賞に挑む

優勝楯の栄冠、森本正州氏に輝く
兼席題の天位賞者児島与呂志氏に不朽洞杯



本社副主幹中島生々庵医師が川柳不朽洞杯会を代表して挨拶（すずむ氏撮影）

川柳まつりは、本年は七月七日、大阪は戎橋、「北極星」の四階ホールで催された。中島小石夫人をはじめ、川柳婦人友の会の操子、きさ子、メ女、一栄、清子等鏘々たる人たちが、この日はかりはと、汗だくで受付され、開会前に既に八分通りの座席が占められ、信州松本の石曾根民郎氏は橋本緑郎氏の案内で、島根、山口、竹原、倉敷、名古屋、米子、愛知と続々と参会、岡山県から集団的に参加されるに至った。広いホールの窓には見なれた川柳祭のほうすき提灯が祭気分を盛りあげてくれる。外から見ても、中に入っても民芸風な「北極星」。天井は、黒地のバックにヒイラギの葉、それにまっ赤な豆電球がかがやいて、誕生日の祝賀会場として百パーセントふさわしい。

川柳まつりは全国的なおまつり、遠来の多数の柳人の参加が、今日のよること倍加させてくれる。兼題の投句にはハワイやアメリカ本土からの作品さえもあって、一時五十分、席題メ切をもつて開会が宣せられた。司会はペテランの西尾榮氏。先生ご夫妻が中島生々庵理事長の誘導で入場され、会者一同拍手を持ってお迎えす



大阪城について講演される天守閣主任の岡本良一先生（多久吉氏撮影）

る。川村好郎氏の開会の辞には「まじ生々庵医師の挨拶。うっかりすると自分の誕生日を忘れてしまふことさえあるのに、この路郎先生のお誕生、七月十日は私達にとって忘れることの出来ない日となりました。忘れるどころか、今年の川柳まつりがすめば、もうすぐその頭で来年の七月十日を考えろ。川柳まつりは昭和二十八年、路郎先生の句集「旅人」の出版記念会を機会に発足したこと。今年で十回を重ねたこと。これを年輪とし、これを一里塚と受取って、一歩、一歩精進しようじゃないか。そして、弟子に孫弟子、ひ孫弟子にかこまれた先生ご夫妻の行末長い御健勝を念願してと結ばれた。

必要ないことまで及ばれた。「川柳塔」の選と新聞柳壇の選のちがい。一句もとれなかつた選。自選、共選、互選といろいろあつても、すぎな句をいたたくという選者は選者の資格のないこと。選者学とでもいいたいものの勉強、堅

路郎先生の柳話は阪大川柳会で長崎柳秀博士が先生の没にせられた句を拝見して「なる程、没は没やなあ」と感心された話からはじまり、選のむつかしさ、選者学の大阪城について講演される岡本良一先生（多久吉氏撮影）

いもの、軟かいもの何んでも知らねば選者は出来ない。そうでないと、病人を殺す藪医者のような誤選をしてしまう。私も水いこと選をして来て、もういいかげんにやめさせてほしいとこの間も理事長にいったがダメ、相変らずの厳選をいつけて行くより、今日の柳庭にたのうといわれ、今日の柳庭にたのうたつた皆さんに深い感銘をあたえられた。

本日の特別講演は大阪城天守閣主任岡本良一氏。公務にある人というよりも、学徒としての熱と力の入ったお話を、これも今日の日にうってつけのものだった。要旨をつぎに。

「天守閣は今上陛下御即位を記念して古図にのっとりコンクリートで復元したのですが、興味はむしろ、大阪城の堀と石垣にあります。石垣の長さは約二里。つかつた石は三十五万個、写真にとつて一つ一つ数えて見ました。空襲でこわれた石垣の修理をしました。それが石垣の組み立て方や、石の大きさもはつきりしました。一個三十万個もする石が大部分。この掛算は一寸数字に弱いものをおつたまげさします。同じく空襲でやられた名古屋城の復活につかた金が六億、六億ではこの石が二千個よりとこのいません。大阪城の大きさがわかるというものです。しかも、大阪城といえは太閤さんの作ったものと思われています。大金をかけて今日残っている石垣を作ったのは、大阪の人があまり好かない徳川幕府なんです。幕府の大名統制

暑中御伺

川柳初篇研究グループ

昭和三十八年盛夏

- | | | | | | |
|----|----------------|----|-----------------|----|-------------|
| 幹事 | 川端柳風 | 整理 | 高須啞三味 | 共送 | 前田喜代人 |
| | 東京都渋谷区本町二ノ四六 | | 東京都港区芝浦佐久間町一ノ五二 | | 下田市入江町一〇二 |
| 指導 | 丸藤井和雄 | 指導 | 清博美 | 指導 | 岡崎重義 |
| | 東京都西大宮町二四四九 | | 清水市入江町二九四 | | 福岡市東区粕町三三五九 |
| 指導 | 岡田十府 | 指導 | 田浦 | | |
| | 東京都品川区戸塚町一ノ四四八 | | 東京都品川区戸塚町一ノ四四八 | | |

川柳雑誌社ハワイ支部

ウイロー社

同人一同



会場の一角(子守氏撮影)

政策の一つとして、諸大名に普請の丁場割をしました。そのこととは石の一つ一つについている定紋又は符号ではっきり知られます。太閤さんは天正十一年から三年間ぐらいで、大阪城を作りました。その時、大阪城の傘下の大名は近畿を中心にしていざい十か十二、三の国よりありませんでしたのに、徳川氏は関ヶ原で天下を握り、大阪落

城を経て約二十年で天下統一の地かためを終り、全国大名に分担させて十年がかりで、太閤さんの大阪城の手直しでなく、徳川製の大坂城を作りました。大々的なもので、各大名のふところを相当淋しくさせるだけの余裕をもっていたのでした。太閤びいきの私たちとしては何とも割り切れぬ思いがしますが、歴史の事実は何としても仕方がある優勝権は支部長、水永東岸氏の手へ授けられた。

路部門の古豪信州松本市の石 歴史部先生の披露(多志氏撮影)



川柳まつり

りません。」
こうして淡々と語られるお話は単なる歴史の講義ではなく人間のかしこさ、おろかさ、にもふれら

れ、社会批判、人生批判、そして人間陶冶に役立つ名講演だった。

ついで席題四題、兼題四題(別項)の披露があり、最後に先生による天の発表があり、児島与呂志氏が路郎賞の不朽洞杯を獲得された。愈々最後に特別課題「先見」の最優勝者は川雅備前支部の森本正州氏と発表された。路郎賞の賞状及副賞は正州氏に、栄えある優勝権は支部長、水永東岸氏の手へ授けられた。

やがて吉田圭井堂氏のあざやかな閉会の辞によって歴史的なこの会合の幕が降りた、時に五時十分前。(戸田古方記)

出席者

- 路郎・愛二・李鳥・一栄・清子・狂二・柳志・香久・伊朗・静島・谷本・丁路・新美・静木・一角・久米雄・東岸・芳月・一平・正州・宗英・清人・小松園・柳堂子・阿久・雅雄・あいき・仙之助・みのもろ・万の客遊子・藤原・真樹・白濱子・つみ・瀧澤・牧人・白柳・美所・梅里・すむ・古珍・民部・三司・繁雄・舟遊・重國子・句楽功・文秋・和子・花柳・すみれ・良・軒斎・孝風・天晴・野登・行人・光・野添路・珠英・満枝・古方・弥生・白木・みさ子・湯之助・廣佑・生重・光子・登月・湖歩・水客・南宗・多志志・短明・圭井堂・有子・井井・保英・本京・千代・私村・雄々・雅生・葉乙女・小石・城東・生々庵・八郎・専断・句念仙・女・清登・染・隆史・与呂志・好雄・操子・きさ子・手袋・スミ・綾部・電泉・七次・市郎二重・志子・曹乃投句美舟・良江・新鶴・善己・白龍児・静渡・江城・紀太郎・アト・さか江・木・投美・龍蛇・独仙・秀美司・静羊・双葉・判・光郎・英夫・味平・すみれ・花美・藤間子・政信・六角・悦子・美代・没食子・宗英・無糖・一路・自然・花柳・藤太郎・ろろ・方火・龍城・愛鶴・九呂平・壽仙・繪屋・秀雄・久雄・一十・涼人・潤雨・けんじ・藤波・浪舟・高生・宗生・凡石・七面山・保夫・湖山・孝風・可任・弘雄・旭峯・慶吉・八九寸・大八州・一平・辰治・木久・千鶴・藤二朗・光道・みのもろ・加仙・鶴江・美恵子・修平・弥生・快夢記・紅

懇親宴 (第二会場)

引き続きいての懇親宴は岩崎愛二氏のユーモラスな開会の言葉で開幕した。川柳まつり歌のオーケストラが奏せられている中で、中島生々庵理事長の音頭で、路郎先生の長寿を祝福して万歳三唱。乾杯。

加藤野郎氏の古豪奇術、今回はトランプで、お椀の抽籤を披露される。さしなや響の丸掛けを口にしなら早くも宴会の常態が高まつてくる。森本正州氏の路郎賞、川雅備前支部の優勝権獲得の喜びを代表して山一一声氏の浪花節、三門博士の「観人観音経」は堂々たる芸術ぶり、今西生富氏の歌切りはおめでたい白旗一対を二と数みて、山内静水氏が、櫻島志氏の不朽洞杯獲得の句「じゆうたんにつましく妻に手を任しぬ」の言葉、続いて野菜、阿久海氏が美声を披露された。次いで藤乃女史がおたやんの面を冠つて「おてもやん」ユーモア味たっぷりの踊りにヤンヤの應援。路郎先生の誕生日のお祝いにこめて踊る女史と、これに見入る路郎先生。ここで懇親宴の熱は最高に達した。梅里、好部両氏のアツク掛けの余興に続く小松園、文秋両氏の歌謡曲の熱演は珍らしく、本日の句会の優勝者正州氏が民謡「津山小唄」を披露される。官席入り乱れてそこで地方紳士との交歓に歡を尽くした。

各人余興一巡した後、石曾根民郎氏の音頭で再び路郎師の健康を祝福する万歳を三唱、午後七時半、来年五月頃に挙行される路郎・腹乃夫妻の金婚祝賀句会での再会を約して散会した。懇親宴の出席者は五十名だった。(福高薫風子記)

ご寄贈感謝

(敬称略)
若本多志志 西居崇 北川春豊 小川恒明 磯崎静馬 高橋孝子 金井文枝 菊沢子松園 中島小石 山川阿茶 住江義典氏

南区医師会文化部 杏林川柳会

- 河村 瑞川
- 中島 生々庵
- 中島 小石
- 御 平尾 太希志
- 御 福井 野迷路
- 御 牟田 一哲
- 御 安岡 珊瑚枝郎
- 御 山川 阿茶
- 御 月 原 宵 明
- 御 今治市常盤町八丁目

福壽司

心斎橋筋大丸前
電話(271)三三四四番



句集「私達」に

現われたキッスの句

直原 七面山

久し振りに句集「私達」を開いてみた。

この沢山(四四三二句)な句の中に、一体キッスの句が何句あるであろうか、しかも川柳家はそれをどう把握し、どう表現しているかを考えて次から次へと「キッスの句」を求めて頁を繰った。

最後に原稿用紙の上に、十六の句とその句主の雅号が記された。

この数から考えてみると、川柳家は、案外キッスと言う現象に対して無関心のようなのである。しかもこれら十六の句は、ただ十人の作家によって削られている。それも七面山五句、一善氏三句、後は一人一句づつである。

さて、これらの句が果して、キッスのどう云った面をとらえているのかを知っておくことも、将来なにかの役に立とうかと思われるので、一応ここに再記しておくた

いと思う。

水からくりキッスされたり
振られたり

この句は擬人法を用いて、くついたり離れたりするキッスの動作を実に巧みに表現してあるが、今の若い人々には、この水からくりというものがよく判らないのではなからうか。水からくりとは、水絡線とも書き、水機関とも書く。意は、水を利用してあやつるもの(装置)で、しかおどしなどもその一種であらう。

が最近、こう言ったものを見る機会は少ない。

接吻を奪われそうな霧流れ
ちみちている句だ。映画のシーンに最適。ムード派の句だが唇を奪

われたかどうかは詳らかでない。

KISS MEなんてまだ

ろしい恋でしょう(魔花麗)

句は決してまろしくはない。ゴチャ／＼云わずはさきさきと抱いて、熱い口づけをやっしまえば……と第三者の方がじれったさにやきもきしている。純な恋とはおよそそんなものであらう。

かくありてこそ、初めて「恋は楽しく美しきもの」なのである。

考えさせてとキッスまでも
逃げ

遅かれ早かれ、彼女が彼氏のものになるのは既定の事実であり時間の問題なのだ。それを、瞬時

も早く、その愛の確証が握りたいと云うのが男の心。相手の彼女が

思うとおりに行動してくれない所に不満が起る。その不満がこの

句を生んだとも云えよう。

課長さん駄目よとキッス断
られ

男盛りの課長とBG。戦後世相の一端がうかがえる。

「君! 今の冗談だよ、冗談だよ」と云って、果して課長は体よくその照れ臭さから逃れることが出来たであらうか。ここでも男

があせている。女に有無を云わせぬようにするためには、なんと

言っても(将を射んとせば先ず馬を射よ)ムード作りに専念する

のが大切。

昔から女性は、ムードにとても弱いんだそう。

キッスだけ

よと戦後派娘
あわてない

(七面山)

「そこえゆくと
この娘さんは至
つてももの判りが
良い。なにもか
も判り切ってい
て。キッスした
かて減るもんじ
ゃあなし、それ
程欲しけれや差
し上げますわと積極的。よくよく
考えてみると、案外こうした娘さ
んは、一見不面目ふしたらなよう
には見えるけれど、実に上手に世
の中を泳ぎ、結構青春を楽しんで、
身も心も熱れ切った頃良縁を得
て、しかも処女のまんまで、さっ
さとお嫁に行ってしまうのかも知
れない。

私の知人にそう言った娘が一人
いたっけ。

足音に惜しいキッスを又逃
がし

互に身も心も燃えて来て、正に
キッスと云う瞬間、コッソコッソ
と人の足音。がこんな時には、人
が来ようが来まいが、そんな俗界
のことにはかかわりなく、彼女を
グッと抱き寄せて、予定どおり、
堂々と「愛情の交換」を行うべき
である。そうすれば、例え厚顔の
士であらうとも、コソコソとどこ

かへ姿を消すだらうから。
耳打ちはキッスさせると馬
鹿にして

(七面山)

「思い違いないで頂戴」と女
性側はカンカン。男の誤算。どう
も男性側は全てのことを直ぐセッ
クスと関連して考え勝ちで困る。

この男もキッスを口に出した許
りに、やがて貰えたであらうキッ
スも貰えぬことになってしまった。
やはりムード作りでゆくより術は
ない。

接吻が欲しいか女目を閉じ
て

(七面山)

よく見聞するシーン。こんな時
には誰れに遠慮がいるものか。例
え相手が人妻であらうが。

満身の力をふりしほって、いと
荒々しく彼女を我が胸に抱き込
み、体の骨と云う骨が、バリバリ
ガリガリ音を立ててくだけるまで

「お買物」
は近鉄で!!

アベノ 上六
近鉄
アベノ77-8331
上六77-3331

抱きしめ、(彼女がその喜びに声を張り上げるまでも)否、彼女の唇が破けて赤い血の流れるまで、キッスキッス。とめどなくキッスの雨を降らせてやり給え。

もともと女性には、愛されることを唯一の楽しみとして、この世に生存している動物(これは失礼)なんだから。

忘れものだとキッスしに戻り
新婚風景と見て誤ちはなからう。それにしてもお幸せなご夫婦ではある。

聞けばアメリカ辺りでは、旧婚でも、こうした風景が随時随所に見られると云う。

五十になっても六十になっても、否七十のおじいちゃんが「アイラブユー」と云って、六十八婆ちゃんを抱いてキッスの雨を降らせるとか。

アメリカ女性を喜ばせるために、例えお国柄が違うとは言え、日本人にはちと理解し難いと云う。

と言つて決して安心はしておれない。日本でも、もともと民主主義が徹底して、女が段々強くなって来れば、或は「愛情のからくり」として、こうしたことが行われようから。

唇を許しただけの螢狩り

(梅里)

農業の故か、近頃は狩る程螢が

居ないのがなんと云つても淋しい。この句はスキップとして嫌味がなく、処女の初々しさが句外にあふれている。さぞかし口づけも、螢の好む水のように甘かったことであろう。二人は人もうらやむ程の幸せな結婚をするに違いない。夜目にも青白く光り輝く美しい神秘的な句だ。

接吻のテストをしてる舞台裏

(初甫)

そこへゆくとこの句の如きは、俗臭ふんぶんで清潔感などみじんも無い。が、この句には又この句としての良さがある。一種舞台人の哀感とも言ふべきものが流れていて。聞く所によると、キッスも、これが仕事と云うことになる

と、とても大変な重労働とのこと。もともとスクリーンや舞台の上で行われる接吻は、金を取ったお客さんに見せるためのものなのだが、時たま不心得者がいて、心から燃ゆる二人が、お客様なんか眼中になく、舞台の上などで真実の演技を見せることもある、と言

う。こうしてみると人生とは、なかなか味もあり素晴しく面白い所だ。

検温の看護婦キッス呉れて行き

(七面山)

看護婦と患者の恋。恋の常道だ。検温に来た看護婦が、人目の無いのを幸いに、検温器ならぬ自

分の唇で患者の、唇を吸い上げ、

恋する男の愛情の熱度がどこまで高昇しているか計ってみるといふ。そして愛のカルテにその熱の高さを記しておく。私も体が弱く入院生活も度々し、その度好きで堪らぬ看護婦さんも幾人かいたが、ついぞこうした機会に恵まれることもなく、甲斐性なしの故か、みんな片想いで、悲恋に終ってしまった。

タバコ吸うようにキッスを

してのける

(竹莊)

これではムードも情緒もあつたものではない。あつさりすぎていて、なにかこうキッスがこの男の義務的行為のようにも思われもして。しかし、それで二人が満足しているのなら例え情緒的であろうが無かろうが、第三者のくちばしを差しはさむべき筋合いのものではない。

接吻のあとのうがいを見つけられ

(一三夫)

うがいの主が男であれ女であれ、キッスの後がこの始末では泣くにも泣けまい。

それ程この句は相手の心を傷つけ、折角の気分を台無しにしてしまった点をよく衝いている。うがいの主は心進まぬまま無理矢理にキッスをさせられたのであろう

か。心の中で相手を憎み切つてい

おるのか。それともまた、極度に衛生思想の発達した潔白性に富んだ人なのであろうか。別れて家に帰

つてからのことならともかく、キッスの相手のいる前でガラガラゴロゴロとは。得てして女性には、突然こうした(向う見ずな)落突的な行為に出る人があつても、(例えこの主が男性であつても)充分気をつけたいものである。相手も自分も傷つかない為。

男もうキッスぐらいで承知せず

(一善)

ここまでくればキッスももう卒業というところ。男はもうキッスだけでは我慢出来ない、もうごまかされないまでに燃えて来てしまつて居るので。

相手の女性が、恋しくて愛しくて、だからムシャムシャガリガリ食べて腹の中におさめてしまいたいのだ。

心から一心同体の境地を望んでいるのだ。こうした思心を世馴れた女性は実にくさばき切るのが、得て素人娘の方は無闇と無用の抵抗を試みて、相手を傷つ

暑中御伺

小児科・沢田医院

沢田四郎作

大阪市西成区玉出本通り一ノ一三
電話 二九一三

大坂形水

大阪市東区系屋町一丁目二

暑中御伺

中島生々庵

中島小石

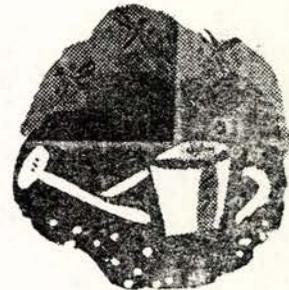
大阪市南区巖谷
仲之町二〇番地

一路集

男まさり

西尾葉選

男まさり男女同権など言わず 十九平
 ネグリジエ男まさりだとも見えず 九呂平
 男まさりどっかと坐り灸をすえ 可住
 三年忌男まさりを認められ 雄々
 楽させて男アル中にまで仕上げ 専翁
 ほめられて男まさりがやほり照れ 千翁
 男まさり阿呆な噂へ笑うとき 宗太郎
 (佳) ホームバー男まさりの腕をふり 同
 この老舗お家はんならこえ支えてき 歌子
 妹の勝氣に兄が泣かされる ひ呂し
 男まさり此処らあたりは海女どころ 同
 外交で男にまさる女腕 藤波
 帆船掛女の生きる道けわし 勝子
 男まさり二人を博士に仕立上げ 雄声
 男まさり母もの映画に泣かされる 同
 男まさりカーの免許を持って嫁ぎ 兼治郎
 男まさりドパツタはチャンと持ち 静波
 (佳) 離婚して男まよりは株に生き 同
 (佳) インタビュ男まさりの声を聞き 李鳥
 鯨が男まさりの手にそむく 野迷路



年頃の男まさりを母案じ 代仕男
 反抗期男まさりをたかぶらせ 静水
 男まさりその上纏緞よしと来て 美
 男まさり人の噂をよそにして 大八州
 男まさり家へ戻れば花を届け 主水
 男まさり好きと一声云えぬまま 隆史
 男まさりうらぎられた過去をもち 光子
 男まさり三代の暖簾守りぬき 隆史
 男まさりでも人の子の母でした 隆史
 (佳) 男まさり時には頭痛膏を貼り 隆史
 男まさり今日は美男の秘書を伴れ 光道
 (佳) 女僕とも言われて左派に籍を置き 同
 割り棹を増やしに妻の厚化粧 同
 後家相と言われて男まさりなり 同
 コンソルさんけんげり首相にのを言い 同
 男まさり弱音吐きたい夜の床 同
 縁談も男まさりを買って呉れ 同
 護身術覚えて女の行く夜道 同
 男まさりの母なくさめるカーネーション 同
 土壇場を男まさりに助けられ 同
 涙一つこぼさぬ母は物足らず 同
 (軸) 男まさりの写真は美人週刊誌 同

潔白

田垣方大選

潔白が自慢で万年平社員 紀太郎
 潔白はあえて女房にさからわず 静波
 潔白を信じてくれない大人の眼 静波
 潔白でない政治家が当選し 雄声
 潔白の子の潔白をなお信じ 十九平
 潔白な証憑一冗談口がきけ 十九平
 心持ちだけの謝礼もつき返えし 九呂平
 疑いの瞳に潔白の選んだ死 勝子
 夕刊の隅に潔白自殺する 隆史
 死んだので潔白だったことが知れ 隆史
 潔白だからきついことも云え 主水
 おみやげが過ぎて潔白うたがわれ 主水
 袖の下効かない奴をもてあまし 可住
 潔白を疑うほうも過去があり 可住
 新築へ潔白までもうたがわれ 雄々
 潔白を信じてほしい遺書があり 雄々
 潔白を信じてオールドミスが待ち 保夫
 潔白を看板にして毎度落ち 保夫
 白ときまりどの新聞も呼びます 八九寸
 合乗りで潔白という方がわり 玉造
 赤くなる性で潔白うたぐられ 静水
 潔白でありたい化粧は気もつかない 木魚
 潔白を信じてくれぬ厚化粧 孝風
 パスガール自殺 同
 百田の潔白明すに死をえらび 同
 潔白に刑事いきなりかみつかれ 同
 潔白な男にされて手が出せず 同
 潔白と言えぬホテルを出る二人 同
 身に覚えのない逮捕状うろたえず 同
 出たところを見たり潔白通させず 同
 貧乏は悲し潔白疑がわれ 同
 潔白は裸にされて死を選び 同

潔白で居ても下積疑がわれ 光郎
 異なとこで会って潔白うたがわれ 光郎
 潔白の気魄巡査が押され気味 萩路
 潔白の証憑は嬰兒の顔にあり 三五島
 潔白な身は面白い非常線 三五島
 潔白に過ぎてても人間味がなし 石峰
 五客
 潔白を立てるに里へ立てこもり 同
 潔白であっても警察いやなとこ 同
 潔白な人が住んでる露路の奥 同
 潔白で戻り悔しい二日酔 同
 潔白のアリバイ二男がばれちま 同
 人
 解剖の結果潔白だとわかり 同
 地
 潔白を主張するから怪しまれ 同
 天
 潔白は立てたし居たと云いとなし 同
 立読み
 木村十悟選
 ペストセラ今日立読みだけにする 東天紅
 立読みへさも出勤のごとく来る 八九寸
 立読みも大事な客にして売れる 孝正
 停電になって立読み諦める 雄声
 立読みがめくる昨日の読み残し 大八州
 立読みのもりが買った気の弱さ 主水
 立読みみの梯子で一冊読み終える 惠二朗
 立読みへ昨日の続き売れて居た 宗義
 立読みに手癖の悪いのもまじり 旭峯
 立読み場の計算案外などれず 暁明
 立読みめないと立読み叱られる 萩路
 立読みがニタニタ笑うて納得し 可住
 つぎ／＼と新刊汚したて去に 静波

金泥集

「白髪」

麻生 霞 乃 選

立読みで老眼鏡を持って出る	李 鳥	立読みで定年同士連れになり	たけお
立読みをした過去もあり立志伝	愛 鳩	通訳を立読みがして辞書が売れ	隆 史
立読みで今日も同んじ顔が合い	祥 月	立読みのみも来る気のページ数	和 三郎
立読みに暫らく来ない子を見たり	静 水	吊革でみた新聞で事故を知り	判 志
立読みへ本屋の犬もよくなつき	光 郎	立読みに今日も来ている子の漫画	雪 美
立読みで儲かる株を見付けたら	榎 雄	立読みも年季番頭に会釈され	紀 太呂
立読みで友の入選見つけ出し	ろ 亭	立読みを見ぬふりして目が光り	兼 治郎
立読みに飽きて彼女はまだ見え	王 石	立読みを呼びに来た子も立読み	勝 子
立読みに隣りに不審なふとう手	さか 江	雨宿り立読み飽いた頃に晴れ	繁 太郎
立読みで度胸をためず咳払い	三五島	デート待ちの立読み活字が眼に入らず	どんたく
立読みだけの男と覚えられ	石 峰	立読みで店番たのんで不浄行	光 道
立読みで声になるかぶりつき	弘 朗	給料日立読みよりもバーの酒	句 業坊
立読みでしんだネタを話題にし	すみれ	立読みであてたクイズが当選し	寿 美司
立読みを混んでいる筈日曜日	杏 花	立読みをこぼれば客がぐんとへり	桂 仙
立読みはまだしき見て盗って行き	生 薑	立読みで仕入れた知識振り廻し	保 夫
立読み若 労 大 学 合 格 し	青 足	立読みと知らず店員頭下げ	久 美子
立読みにわか雨また立読み客がふえ	光 子	冷房が利いて立読み長くなり	辰 始
		立読みもゆるして貸本よく稼ぎ	秀 峰

立読みをして学校にまた遅れ	孝 風
立読みと判ついても断れず	野 菜
立読みの子を呼びに来て仲間入り	井 主堂
立読みのお手垢ばかりで売れ残り	藤 波
立読みのお隣同志目が笑	隆 史
立読みのお隣同志目が笑	代 仕男
立読みを教師へ店主茶をすゝめ	宗 太郎
エロ雑誌たつり読んだ辞書を買	むしな
立読みの外に万引されていた	千 翁
立読みの中鼻糞丸めとり	春 己
立読みに店主がにらみ返される	涼 人
未だおぼる気か立読みガムを替え	素 身郎
立読みをよそおい刑事を待ち	惠 三郎
立読みという道草を子がおぼえ	十九平
アライブにする気立読み電話借る	

白髪にっこり畠の中の人 美 喜	白髪にっこり畠の中の人 美 喜
パパもママも白髪が増えて御用満	同
初恋の人の白髪も美しく あいき	同
はげて来て白髪の人のおうらやまし	同
母系似の白髪に愚痴を又ならべ	周 甫
生きるため白髪も爪も赤く染め	美 代
白髪でもあれば染めも出来よう	しげ子
白髪気にならぬ七十染めもせず	勝 子
夜の癖白髪の方へしやくはずみ	みさ子
社長室ロマンズグレイ元気なり	寿 美司
祖母病んで阿達ヶ原の涙み見せ	霞 乃

次回「玄関」メ切八月末日

暑中お見舞

申し上げます

麻生路郎先生選

大 万 川 柳 会

投句ご希望の方は(課題40頁参照)

大阪市阿倍野区松崎町3の10 松江梅里方へ



七月七日の川柳柳まつりに不穏な光景を
受賞した児島千恵子氏(多岐志重氏)

柳界 展望

句会

▼本社八月句会は七日(水)午後六時から千日前電停前

自安寺で開

催する。浴後の浴衣がけも結構、暑さに負けないで柳友誘い合せての御出席をお願いする。▼南区医師会文化部杏林川柳句会(大阪市)は七月二十四日(水)午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼南海電鉄句会(大阪市)は七月十八日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼大阪通信病院川柳会七月句会は二十日(土)午後一時から北館五階会議室で開催。▼コクヨ川

柳会句会(大阪市)は七月二十六日(金)午後五時半からコクヨ株式会社会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼弓削川柳社十五周年記念第十五回西日本川柳大会は八月八日午前十時から岡山県久米郡弓削小学校で開催。兼題、太陽・ニュース・尾行・パトカー・交差点・ナイト。我社からは中島生々庵医博が選者として招請され出席。投句は百円封入の上九月四日までに岡山県久米郡久米南町、弓削川柳社宛。▼川柳備前支部(岡山県)六月句会は川柳まつり出席者壮行会を兼ねて二十八日横山一声居で開催。▼全国鉄川柳人連盟第七回全国大会は昭和三十八年七月十三日十四日の二日間四国琴平町びぜんや旅館で開催、百六十数名出席という盛会であった。▼川柳岡山支部六月例会は十五日岡鉄クラブで開催。▼我楽荘川柳大会(名古屋)は六月二十三日西祐寺会館で開催、六十数名出席の盛会であった。▼青森県川柳社創立十五周年記念川柳大会は九月二十四日(火)午前九時半から黒石市大字内町黒石公民館日本間で開催。兼題、進・青・森・健・川・柳・社・雑詠、各題二句、投句は九月十日迄、投句料五十円封入の上、黒石市大字市ノ町五〇ノ三青森川柳社宛。▼第八回石川県下川柳大会は九月一日(日)正午から羽咋市一ノ宮町正覚院で開催。兼題、迷

惑な話・蟻・坂道・黒子・雷・灯籠、各題三句、投句は三十円封入の上八月三十日迄に羽咋市新保町ヤハノ一栗の保川柳社宛。▼第十四回名古屋まつり協賛三十八年度名古屋短詩型文学祭川柳作品は近作三句を八月末日迄に名古屋市役所社会教育課文化係宛。▼えんびつ百号記念川柳大会は八月二十四日二十五日石川県奥津温泉かみやで開催。兼題、作家・これから・一番・円満・指定席・フット・アンケート、各題三句、投句は五十円封入の上八月十五日迄に石川県辰口局区内米丸えんびつ百号記念大会係宛。▼広島平和祭川柳大会は八月四日(日)午前十時から広島市中島町平和公園内平和記念館二階で開催。兼題・窓・星・わさび・湖・椅子・謡曲・あやまち・誓い、各題三句、投句は前日迄に広島市三滝町一三〇八の五広島川柳会宛。投句料五十円。▼黒川紫香氏(豊中市)の定年退職記念の句会を六月二十日に嵐山の阪急保養所で開らき併せて阪急川柳会十五周年記念句会を開催。

消息

▼戸倉普天氏(兵庫県)の村では、雪害と未曾有の水害で農作物の収穫は半分以下、寒気と湿潤のため老人の衰弱が目立ち殆んど寝込んで有様だが、氏は極めて壮健で山野の労働に精を出され、夜遅くまでの読書、執筆を楽しみ

一著名作家の川柳句集一

浜田久米雄著 麻生路郎序



定価300円
送費50円

★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山の産。多年不朽洞会員として又国鉄川柳人として古豪の名をほしいままにしている。三十余年の柳歴を飾る数千句中より百句を自選し、各句に感想を附して世に問うもの。
★出版予定日。十月初旬
★五〇〇部限定版につき御申込は早く。
★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

大阪市住吉局区内万代西5丁目25

発行所 川柳雑誌社

電話大阪局6081 振替口座大阪75050

とされ、六月十六日(日)には京都のエジプト展を見学された由。▼石曾根民郎氏(松本市)は川柳まつりに出席のため七月六日米飯、夜の寄席を棄れました。七日は宴会後、宿舎の緑雨氏居へ薫風子氏と同道、川柳の四方山話をされ、八日正午上六発で、帰松された。▼米沢曉明氏(大洲市)は七月二日耶馬溪へ。中津市の歓迎を受け同夜は別府泊り。「禅海の心にちよっとふれた旅」▼石倉旅風氏(大阪市)は六月二十日大原の寂光院、三千院に遊ばれ、「大原の雨をさかかに夏の昼」の句を寄せられた。▼牟田一哲氏(大阪市)は昨年五月以来肝炎のため臥床療養されていたが、昨今殆んど常態にまで恢復された。▼河野春三氏(大阪市)は西島商事株式会社

の専務としてナショナルスーパーを経営、六日二十六日華やかに開店された。▼森田若人氏(鳥取市)は昨春上阪して葎乃先生と初対面して帰鳥、その直後から健康を害して入院静養を続けていられたが、七月一日勤務に復職された。▼築山快夢起氏(ホノルル市)は前後三ヶ月に亘る訪日の旅を終え、六月十日入港のクリーズランド号で無事帰宅された。▼坂東若芽さん(布施市)は静養を続けていられるが、「寝ころびよむ聖書へ風鈴鳴りつづけ」の句信を寄せられた。▼越智一水氏(今治市)は七月十三日伯耆大山に登山。来る途中で岡山、鳥取地方の四十四年ぶりの洪水に会い、怒れる水に対する人間の小ささを痛感された。「頂を眺めて靴のひもを

不朽洞の人々



寺崎電気産業KK 西田 宏 氏

とにかくこぜわしい男である。いつも何かと首をつっこんでバタバタしている。それでいて傍で見る程本人は気にもせず、結構愉しんでいるのだから偉なものだ。

気も若く、見かけも大分若く見られるが、芯は路郎先生の句

「古くとも僕には仁義礼智信」

が優先する大正ッ子で、器用貪乏そのままという世話焼きでもある。趣味も近年漸く川柳と、尺八に落付いてきたようだ。

結局は又も自分でしてしま

柳宏子

しめ」▼麻生アト氏(奈良県)の夫人静枝さんが怪我をされギブスをつけておられると。一日も早く快癒を祈る。▼西辻竹青氏(奈良県)は七月八日から吉野熊野国立公園の視察を続け、十日新宮市の丸旅館に到着された。「古里の錦がダムの下に眠る」▼高鷲重純氏(尾道市)は近來視力弱まり、活字の拾い読みさえ出来なくなり、第三者から読んで聞かしてもらっていますと。▼林昌男氏(岸和田市)大阪市堂島の公共職業安定所庶務課長に就任された。▼横山一声氏・目賀芳月氏(岡山県)は川柳まつりに出席の際、手製の短冊掛五十枚を持参、本社へ寄贈された。▼山内静水氏(竹原市)は川柳まつりの帰途まっすぐに大阪駅へ。初めての寝台車の寝心地を満喫された。帰宅すぐ十三日十

四日の夏祭の準備に精を出され、十三日は琴平で開催される全国鉄川柳大会に出席の予定とのこと。▼渡辺睦童氏(今治市)は四月から二小学校的廃校、統合、通学船の新造、会計検査、定例調査、学力テストの集計等で多忙な日を送っていられるが、七月九日の全国教育長大会のため岡山へ、帰途浜田久米雄氏を訪問久瀧を叙し大いに歓談された。▼田中美喜子さん(熊本市)は七月九日から十一日の三日間、花畑町セルパン喫茶店で絵画の個人展を開催された。▼山田秀賢氏(高槻市)は全国鉄川柳人連盟第七回全国大会に出席のため七月十三日琴平町へ。「観光の琴平に来て蚊にくわれ」▼野村味平氏(加賀市)は心臓肥大と肝臓病のため加賀市大聖寺水町四、竹浪医院階下特別病室に入院され

た。お見舞申上げる。

句集・柳誌

▼川柳高知支部柳人句集「化石」が昭和三十八年六月十五日発行された。高知支部としては第二句集、一人二十句づつの句と作家の言葉、住所、職業が添書してある。松江梅里氏の題字、B6型百七頁、非売品。▼国鉄川柳句集一九六三年版が六月二十五日全国鉄川柳人連盟から発行された。奥田白虎氏の序があり、国鉄川柳人の第七集。B6型百一頁、定価百五十円。▼村山白雲著句文集鴉は「あるく」は昭和三十八年七月秋田市大町二丁目三光堂書店から発行された。洒落た題名は川上三太郎氏の命名、腰稚カリエスを再発してから十年の著者なれば、「寝敷した年玉を子に分け与ふ」「荒縄で病灯を吊る風荒ぶ」など闘病吟

が多い。随筆二篇を併せ収めてある第二個人句集、B6型八十六頁、定価二百五十円。▼川雑米子支部川柳松露百一号は昭和三十八年六月一日百号記念全山陰川柳大会特集号として発行。▼川雑京都支部は「川雑」四十九号を昭和三十八年五月十六日発行、昭和三十八年五月から昭和三十八年三月までの京都支部句会吟を収録したのも。▼川雑高知支部は「川雑高知」五月号を八周年記念号として発行。

▼川柳と俳句研究誌「かはる」創刊が昭和三十八年六月十五日東京中野区鷺宮一の八四俳諧かほる会から発行。一部五十円送料十円。

の残り少ない柳人の一人で廟吟で有名であった。故吉川雉子郎を柳界へ引っぱり出したことは人に知られていいる。謹悼。

電話開通・局番変更

▼岩崎愛二氏(京都府)は宅に電話開通した。

京都九二局二九七四番

▼菊沢小松園氏(大阪市)の営業所の電話局番が変更になった。

大阪六二二局六六四四番

▼松江梅里氏の電話局番大阪(六二二)と変更、番号は従来通3935。

▼水谷竹荘氏宅の電話は局番も番号も変更、大阪(六二二)九五三一。

正 誤

▼六月号九頁上段最初の句、「見るとただ黙って母の恋を見る」とあるは、「息子ただ」の誤りに付訂正。(薫)

不朽洞会から

☆新会員紹介

- 六月 中川晃男(出雲市)正
- 七月 緑之助氏推薦
- 柳葉鶴丸(松江市)正
- 雄々氏推薦
- 八月 都倉求女(京都市)正
- 大江秋月(兵庫県)正
- 中塚礎石(相生市)正
- 以上水客氏推薦 (多)

大萬川柳

「悪名」

入選発表

選者 麻生路郎先生
投句総数四百七十三句
入選 六十二句

悪名の釜ヶ崎にも咲くあざみ 大阪 泉

悪名が冒険好きの娘にもてて 空岡 白梅子

悪名は酔うと泣く癖からむ癖 大阪 野菜

悪名の道路に這入る果境い 貝塚 一鶴

刺青も妻び悪名忘れられ 秋方 珠笑

悪名も飛ばせぬほどに病みやつれ 大阪 あいき

悪名が通りこの街支配する 鳥取 素身郎

悪名など耳もかさないガード下 岡山 知恵美

遺産飲みつくして悪名だけ残り 大塚 玲人

悪名はないが叩けばほりが出 大阪 恒明

悪名も愉しと異常性格者 小平 高志

悪名を通天閣の下で売り 西宮 牧人

成り金のまだ悪名に気がつかず 泉南 美恵子

敗戦が尊氏の名を見直させ 堺 狂二

悪名の政治家正直すぎました 大阪 双葉

また焼いてうわさ通りに焼け太る 大阪 水客

悪名も成仏しろと押まれる 大阪 文蝶

はったりの悪が知れてきて金になり 岡山 東岸

悪名の中に側近名を連ね 神戸 どんたく

悪名を女は否定もせず笑い 空岡 遠二

悪名を売った母校をなつかしむ 大阪 野迷路

悪名を気にしないのかまた出馬 児島 恵二朗

家康がベストセラーで名を雪ぐ 岡山 宗義

とどろくや悪名の方で当選す 豊後 方大

悪名のおステスちやつかり貯めている 岡山 周甫

家庭では悪名なんて嘘のよう 大阪 良

悪名に小心者が死にました 刈野 静波

落ちぶれたボスに悪名だけ残り 大阪 良

親馬鹿の耳に悪名まだ入らず 岡山 藤波

悪名は沙漠を越えて知れわたり 豊前田 きさ子

三年忌まだ悪名は生きている 大阪 柳志

悪名の姑が財をきづきあげ 大阪 寿美司

悪名が知れてマスコミたかつて来 大阪 竹莊

悪名市場串カツの匂いさせ 大阪 竹莊

悪名がなんやと女将恐がらず 同

悪名へ小さい親切追いつかず 東北 好郎

悪名へ大きな声で笑ったとき 大阪 春葉

歴史が解決するさと悪名気にして 同

羽田着もう悪名は忘れられ 石川 宗太郎

悪名へ大臣からも花環が来 同

悪名が邪魔にもならず当選し 大阪 阿茶

悪名のしんの強さを買うも居り 同

几帳面すぎてこて屋とそしられる 大阪 薫風子

悪名に百日憂ふさわしく 同

僧籍にあり悪名を世に残し 同

政敵に悪名高き幹事長 大阪 梅里

悪名を遺し香煙絶間なく 同

政治ボスなどと言われていい気なり 同

何々大笑して悪名聞き流す 同

悪名はマダムの耳にすぐ這入り 米子 雄々

悪名は部下のせいだと廻り椅子 同

悪名を打ち消すような寄附の高 同

札束を数え悪名意識せず 同

悪名の俺に妻だけついてくる 泉南 美恵子

法名は善人らしい名をもらい 空岡 桃里

悪名をうけ継ぐほどの養子来る 井原 一十

悪名も高く首相の椅子長し 大阪 文秋

悪名のいまは故郷の語り草 大阪 晃

(人) 経理部長を経て通って会社無事 泉北 好郎

(地) 悪名が信じられない低姿勢 大阪 良

(天) 法律を守り金貸し憎まれる 空岡 遠二

大万川柳ベストテン (七月現在)

一 薫風子 一五、〇 大阪

二 好郎 一二、五 大阪

三 梅里 一一、五 大阪

四 遠二 一〇、〇 大阪

五 文蝶 一〇、〇 大阪

六 圭井堂 九、〇 大阪

一〇	柳志	六、〇	大阪
〇九	東岸	六、〇	大阪
〇八	恒明	六、〇	大阪
〇七	宗太郎	六、〇	大阪
〇六	桃里	六、〇	大阪
〇五	真奇	六、〇	大阪
〇四	野迷路	六、〇	大阪
〇三	珠笑	六、〇	大阪
〇二	晃	五、五	大阪
〇一	阿茶	五、五	大阪
〇〇	春葉	五、五	大阪

次の兼題「雀」五句以内

メ切 八月十日 発表

メ切 八月二十日 発表

メ切 九月十日 発表

メ切 九月二十日 発表

投句先 大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇 大万川柳会

みんなの暮らしが明るくなる
セクスイのプラスチック

積水化学
本社 大阪市北区宇島町1



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 川柳まつり (大阪市)

7月7日 午後1時

会場—— 北極星会館

川柳まつりの関連記事は30—33ページを
ご参照ください 編集部

兼題「本心」

若木多久志選

さり気ない握手本心爪を立て 八九寸
本心は隠かくしてくれず 膝枕 満潮
大口の寄進次には出る 積り ろ亭
口ほどでない本心にすがりきり
本心は親にも見せず 孤強なり
本心は営業用とちがいます
本心を余談のように云うて 恋 静波
本心をかくし切れない 頬を染め
本心でない指切りは 幾度でも 毒眼子
別室へ呼んで本心聞いて やり 兎男
わかって女はそれを聞き返し 弘村
死ぬほどに思う心を よう云わず 七法
本心を三面鏡に見つめられ
本心は二号の方が知っていた
只一人妻が本心知っていた
酔うたふりして本心は打ち明けず
本心にふれては ほんのり赤くなり
本心の通りに云えるよい 身分 古方
嘘でない男の涙見て しまい 市郎
本心も本心命かけた 恋 水京
転勤がきまり本心打明ける さかえ
本心を知らず 毒舌席をけり 清子

本心でない云い裏が吃りかけ 加泉
底深い眼が本心を覗きこむ 加泉
本心を偽りされぬ 覗きあけ 紅月
膝頭揃え 本心覗かせず 野迷路
本心がさっぱり読めぬ片えくぼ
本心を見抜いて 記者の目が笑い
本心は許す気女目をつむり 七面山
花嫁の本心早く脱ぎたがり 久米雄
頭を見て本心をきく酒をつぎ 小石
だまってる眼が本心を見きわめる
別れてもいど本心を見きわめる
本心は嫌いどころでない日記
本心でない御祝辞のきれいすぎ
本心を聞けば女はただ笑い
本心に触れて本心さらけ出し
事金に触れて本心さらけ出し
本心を例え話で持ちかける
冗談の中に 本心覗かせる
本心を日誌の隅につしめる
母なればこそ本心見抜いとり
本心でなかつた事にして詫びる
本心を牧師やさしい目で見抜き
胡麻すって 逆に本心見抜かれる
本心を明かし左遷の旅に出る
本心を包むご念のいっただ嘘
本心で流す涙を見てくれず
本心はかぶりつきから見上げなし
感通いされて本心らしゅう云い
ここだけの話本心らしゅう云い
思うつぽ先方様から折れて来た
正直に本心云えば 腹を立て
書置きにまで本心を偽わる 氣
本心をうかつに見せぬ金ができ
どこまでか本心酔うたら 口説きは
手土産を出して本心うちあける
本当の友だと知った左遷の日
弁護士にだけ本心を云う不倖せ
肚割って男同士は 飯み直し
本心と別でも 涙落ちてくれ
飲むばかり酌くばかり 本心口にせず
びた一文貸さぬ心で聞く 長さ 圭井堂

兼題「円満」

松江梅里選

天皇の心はもつと歩きたし さか江
本心に遠くおとこの喉仏 水客
本心を先によまれた 金包 阿茶
冷えお茶まだ本心に触れて来ず 三司
本心はそんなつもりでない皮肉 多久志
満ち足りた二人へ春の湯はうらら
円満な夫婦に子のない悩み聞く
歳費上げる時だけ円満とは悲し
円満なお人してたと掌を離せ
円満な解決しましたと離婚
円満な家庭の子を望まれる
円満な仲をとやかく人は 妬き
円満にゆきたい嫁へ聞かぬ振り
恐妻家円満主義と答えたり
ごて得も折れ立退き無事に済み
円満に別れ雄さん 蝶々はん
円満妥結なんやら損をしたよう
円満なことも往診見をかえり
円満なわけかごころ女房若返えり
円満主義云うな云うなと押えり
円満が宿の女中をあきれさせ
円満にされたと妻は信じて居
円満な人格妻に 飼育され
円満な人が 婿ごうが笑おうが
円満な村かきまわす選挙が来
円満な調のとれた嫁と住み
円満な家庭と云われた数かれとり
私生活婦随と云うて風波なし
叱る父かばう母居て 円くゆき
円満へ恐妻と云うテクニク
円満と云うお隣りに 異議があり
円満を欠く 発言の 速記録
円満にいとるに 赤旗ふりくき
円満はあんまり欲のない 夫婦
円満な奴やと 氣になることを云い
円満に事を運べば 金が要り
さりげなく下駄揃え合うて 夫婦
円満に 離婚届に 調印し
円満な家庭に 育ち 覇気がなし 阿茶

兼題「風変り」

清水白柳選

円満退職と云うことに 謙になり
愛の巢が円満すぎて逃げかえり
円満な離婚へ二号知恵を貸し
興もなく円満な意見吐いておき
手を打ったところ 酒の出る 手筈
円満に別れて来たとなぬかしたり
円満な村をさわがす ダム工事
円満なところを 肴にされて 酌ぎ
泣き寝入りただ円満に円満に
円満にすませば 意地が負ける 宵
円満に別れる 恋に入ら 涙
円満が孤独な母の 氣にふらず
別宅のほうは円満至極なり
円満に慣れて 刺戟がはしくなり
円満にやってくる ちい云うて来ず
円満にすませば 奥歯をかみしめる
手のひらの円さこぼれる水でよ
円満な顔で 芽出度く 呆けたま
円満に歩巾をそろえて 家裁出る
円満は電話へ替る 替る 出る
円満な顔朝風呂の中に 浮き 梅里
豪傑と云われるほどの風変り
女の無口風変りに 見られ
風変りな世相 旅券が見て 帰り
風変り 飄飄として 風と行く
風変り 奴豆腐に 茶漬喰う
風変り 昔のままが 氣に入られ
パーティーに 羽織袴の風変り
風変り 生命をかけた芸を 持ち
丸刈を風変りとは 情けなし
風変り 過た名も五つ六つ 持ち
風変り 山で風変りとも見られ
潔癖が過ぎて 風変り びれられ
風変り 山下 清 変わる 風変り
今 東光僧侶 仲間の 風変り
宮田 舞も 持て 余ま したる 風変り
風変り いたく つな 旅で なし
ベレー帽くわえ 煙草で 人を見る
金が出来 風変りの 旅して みたし
風変り 旧家の 癖が まだ 抜けず 蟻 蛇

風交りな祭に出あう旅靴 和三部
 税務署も一目置いた風交り 雄々
 風交り紅一点で又來てる 真砂
 会社ではみんな知ってる風交り あいき
 風交りやさかいと一目おいてくれ 牛肉を家で喰わさぬ交りよう
 風交りな名前で社長に覚えられ 芳茶
 風交りおへそも少し曲ってる 客遊子
 風交りのらりくらりと日を暮し 凡石
 風交りな男でせった履いて出る 操子
 お隣りは夫婦揃って風交り 一栄
 変風りな服でもモザルなら似合い 東岸
 風交りな服も困地に暮す昇栄 光道
 風交り犬も振り向き立ちどまる 行人
 風交りな店招かざる客ばかり アート
 職人の爪はいびつのまま 育ち 柳志
 風交りな家やなと猫も落ちつかず 梅里
 風交りあいつも俺と同じ干支 湖山
 素封家の孤独に慣れて板ぞうり 無極
 風交りな部屋でコーヒー告がする 民郎
 個性強すぎた養老院で果て 江
 ひよつとした世間の方が風交り さか風
 風交りなおお人でしてと妻が詫び 旅風
 風交りでも通りそろそろ寝も売れる 万司
 風交りで通り町内よりつかず 小石
 風交り数字に弱い無性無性 舟遊
 風交り相変らずの無性無性 雄声
 風交りなんて勝手に人が云い 柳宏子
 正直に生きて風交りと云われ 東岸
 生甲斐のピントが違ふ風交り 恒明
 風交りだからと先輩いってくれ 軒滴
 風交り全財産を持ち歩く 失名
 風交りまだ焼跡の小屋に住み 行人
 風交り呑み込んでいて妻の愚痴 市郎
 税金をもう持って行く風交り 谷水
 せいっぱい生きてるに風交り 古方

兼題 「星」

正本水客選

火事騒ぎすんで見上げる流れ星 光郎
 式すめば星の話はしてくれず 方大
 叱られた子に母さんの星が出る 保美
 道化師の道化の顔を星へ拭く 六竜子
 残業に今夜も同じ星の位置 綾美
 植え終えて星がきれいな腰をなで 九呂平
 星の屑にたつて地球へ消えに來る 湖山
 乾盃のグラスへ青い星こぼれ 小松園
 惨劇のその夜の星も光ってた 白女
 尼寺の屋根一っぱいに星光り 客遊子
 星運に恵まれず金蓄めるだけ 一舟
 落ちぶれて見ればつめた星の色 明朗
 別れ来て見上げを星が追つかける 圭井堂
 辿り着く密航船へ星あかり 保美
 星一つ稜線のみで黄昏れる 良
 せいっぱい輝けども明けの星 アート
 何億光年とは駄法螺のよに聞こえたり 周南
 北斗七星軍務の中に見たる星 喜仙
 雨降ればお星さん皆寝てしまひ 庸佑
 満天の星をかきわけ星流る すむ
 子に星を指さし遠き日の想い 自然
 眠むるなと星がささやく漂流記 惠二朗
 宇宙服着た星と連語で喋り 七面山
 人間衛星をうきまきに見てる星 白木
 アベックの話題変えさす流れ星 加泉
 星だけが知ってる二人の散歩径 実世
 星空へ明日の仕事の予定組み 没食子
 二番星まだまだ水車踏む気なり 摩天郎
 合性の星が合ってたのに別れ 永断
 降るような星へ一服啜る夜警 玲人
 天の川がおあったらなに位置 恒美
 眼帯にどうもおかしな星の位置 恒明
 望遠レンズ星の神秘消す 宏子
 何が飛ばうが泰然たり星座 好郎
 衛星の廻る地球に田植する 紅月
 逢えた夜の歓喜に星もまたたり 梅里
 星の道ビールのゲップして帰る 笛生
 星のない煤煙都市のネオンサイン 晃
 泣いた目に星が小さくじんんで居 軒滴

夏の恋あらかた星の名を覚え 薫風子
 星の位置夕と同じとこで待ち 緑雨
 自転車にまたがたままで星見上げ 白柳
 女性衛星の声は虚栄に似て高く 万的
 草に寝て星は大きく迫って來 きさ子
 後進にゆずれば天の川があり 久米雄
 星の数はど男だけで二人 一十
 星空のただそれだけで良い他人 弦月
 カーテンの裂目で星に見つめられ 樽雄
 仏法僧いまいまかへ流れ星 八九寸
 釣れだして夜釣りは星をもう忘れ 白溪子
 君嫁ぐ宵に見飽きぬ天の河 さかえ
 降るような星は語らず事故現場 小松園
 心のゆとりが星空を仰がせる 清子
 星見れば慰さめるようにまたきし 柳宏子
 焼跡で星を見上げていた広さ 柴
 初航海母が恋しうなった星 阿茶
 浮気な星は流れ星となり 一鶴
 寝転べば此に星の山の宿 薫風子
 星空へ明日の仕事の手順決め 軒滴
 ジョウネン星もオキも目に入らず 好郎
 死んだらな星になるんやと子を残し 城東
 星はもう神話の光りなげてこず 景
 かかる世に星は素直にまはたきぬ ラフシェアワーご存じあるまじお星さま 柴
 初恋に星は隣りものと同じ 恒明
 四ツ橋であしたの星を見せられる 高志
 流れ星消えたあたりを子に教え 春己
 ハワイ着少しは星の位置もはずれ たつみ
 巨星落つ生きてや書かぬ記事はずれ 没食子
 星の下となくナイールの砂がやつと冷え 舟水
 著い星見れば見るほど遠くなり 谷方
 星空は習うた通りに出ておらず 古風
 星一つ見えぬ空だと帰って來 柳志
 ハイウェイ星へ向って納涼パス 緑雨
 晴天に星のまばたき聞こえそう きさ子
 うぬばれて見ても一等星でなし 珠笑
 天に星地にビール党ビール党 阿茶
 美恵子

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区 深藏町 5 (361)9373代
 支局 東京都千代田区 神田錦町 2 (291)9629代
 名古屋市昭和区 村田町 2 (88) 9069

不快指数じゆうたんしもうとこもなく 民郎
 松竹梅生けじゆうたんの目出度い日 水客
 じゆうたんの敷いて貯金も少し出来 進之助
 じゆうたんの噛んでスピッツくられる 阿茶
 じゆうたんの敷いて一週の家に住み 満秋
 じゆうたんの赤も嬌しい高砂や 清源
 じゆうたんの感触で踏む夏の草 旅風
 じゆうたんの部屋で花嫁出来上り 童子
 じゆうたんの赤が個展をひきたせ きさ子
 じゆうたんの今日は花嫁として歩き 舟遊
 じゆうたんと今日一日のアルバイト 舟遊
 じゆうたんの宿泊料に含んで居 満潮
 じゆうたんと土下座おとの恥とせず 瑞歩
 団体が引きよびじゆうたんの敷いて 満潮
 玄関へちよびりじゆうたんの敷いて 満潮
 じゆうたんの掃除に困る雨上り 満潮
 じゆうたんの替えて見合の客を待ち 満潮
 ツイストにじゆうたんならな思ひ 満潮
 じゆうたんの上でもあぐらかきながら 満潮
 じゆうたんの威力じゆうたんの色がさえ 満潮
 じゆうたんの靴のよこれが寒寒し 満潮
 じゆうたんの靴のよこれが寒寒し 満潮
 じゆうたんの赤へ緋鯉がはね上り 満潮
 じゆうたんの月眠づくめの家具をおき 満潮
 じゆうたんに嬉しい酒をつきこぼし 満潮
 じゆうたんの踏みふみ宿料気にかかり 満潮

じゆうたんの踏んで貧者の味方せず 宗義
 じゆうたんのままで旧家は亮に出し 柳志
 じゆうたんの靴で踏ませてよく儲け 文秋
 じゆうたんとつづく妻に手を貸しぬ 与呂志
 じゆうたんの感徳円天井を見上げ 春巢

席題「注射」

石曾根民郎選

注射でもしとけと看護婦まかせなり 恒明
 ゆかたの腕まくると注射のあと二つ きさ子
 注射だこまだ退院が許されず 久米雄
 注射もした美容体操も やり 繁雄
 爪染める腕にちらっと注射あと 和三郎
 看護婦のほうが確かな注射針 静水
 愛してる証掘注射の手がふるえ 一声
 早く効くような気がして注射にし 文秋
 看護婦がきれいで注射好きになり あいき
 眠けがしますと注射へ医者笑う 水客
 注射してストへ対抗せんとする 東岸
 ホルモンを妻に内緒で注射する 七法
 根性が似ていて注射いたがらず 白溪子
 手術台注射のきいた音になり 操子
 注射針素直病氣を知っている 文秋
 子の見舞注射のあとをもうやどり 野菜
 痛くない注射にパパは目を つもり 珠笑
 注射して何が何んでも勝つつもり 柳志
 學術映画今注射器の 大写真し 古方
 もう無駄の注射家族のために打ち 静水
 注射でもしときますかとらうさがり 柳志
 注射するよりはますますかと飲む薬 柳宏子
 注射うちながらエロ本の 原稿 満潮
 注射などこわくない子で親苦勞 清人
 遺言が聞きたい注射打ちつづけ 好郎
 注射せなまなぬと誘うピヤホール 生薑
 女医さんの注射へ男語を合わす 失名
 注射針生命のありかたしめかめる 民郎

席題「抽斗」

浜田久米雄選

抽斗が悲鳴をあげる鼠が出 野迷路
 抽斗を洗っているのにこまり 雄一
 抽斗へ末っ子までが鍵をかかけ 柳志
 抽斗をたしかめさせている電話 柳志

抽斗の中に当らぬ宝くじ 李鳥
 小ひきたし女の夢をこわすまい 民郎
 ずぼらなくに抽斗の中は片付いて 柳宏子
 抽斗の隅船ありて社長室 八郎
 抽斗に去年の恋が眠ってた 狂二
 女教師のロマン抽斗知っている 隆史
 抽斗を開けても知恵は出てくれず 文秋
 抽斗につけた指紋で運がつき 瑞歩
 抽斗の奥の奥なる質屋札 晃
 抽斗の小銭をあさる電気代 清子
 抽斗にまだ黙八が光って居 満潮
 抽斗を閉めろ開けたり暇に見え 水客
 退職の抽斗あけてただしめる 東岸
 抽斗をいずれば整理するつもり 旅風
 抽斗に煙草をやめた象パイプ 圭井堂
 抽斗の遺言状が物云い 主新
 抽斗のすみで家宝は虫が喰い 万馬
 抽斗にあるへそくりは高が知れ 静馬
 抽斗のなかで思い出しなびて居 晃
 抽斗の底に眠っている系図 清波
 抽斗へ空果も同情してかえり 宗義
 抽斗に家に運べぬものを入れ 保美
 抽斗の底で仕末書眠らせる 天樹
 握手して抽斗の鍵受け継がれる 静馬
 逃げた恋まだ抽斗の隅でもえ 芳月
 抽斗に鍵あり珍書しまわれる 久米雄

席題「おしやれ」

藤井明朗選

花けそうな顔しておしやれ風を切り 珠笑
 おしやれしだして帰りが遅くなり 梅里
 恋人が出来たおしやれに念を入れ 牧人
 硝子窓今日もおしやれの役になら 瑞歩
 年頃のおしやれする娘へ気のあせり 清子
 バカンスへ五十のおしやれ見せける 三更
 女同志よればおしやれの話が出 女
 一寸のおしやれが噂になる未亡人 女
 縁遠いおしやれだんだん派手になり 清人
 流行のおしやれ若さでこなして着 あいき
 おしやれに生きがいが三十娘です 水京
 恋のえくぼがいつかおしやれになつて 民郎

ウインドで一才直した髪かたち 清人
 父ちゃんのおしやれ少しやれている 一声
 バイトする妻のおしやれが気になる 静馬
 おしやれと来たに気付かぬ憎い人 東岸
 おしやれ嫌い女医の若さが惜まれる 民郎
 いいチャンス目立たぬほどにたおしやれ 旅風
 おしやれしてババ四十の抵抗期 客遊子
 おしやれでもしたら嫁へ気をつかい 白溪子
 学業はビリでも上手にしておしやれ 井平
 もう一度花を咲かせるおしやれをし かつみ
 お目当てのおしやれなかなかひまが入り 梅里
 身についたおしやれ五人産んでも 良
 衛星から降りておしやれも女なり 瑞歩
 羽田着任きと変わったおしやれ 清子
 足よりも細いズボンをおしやれ 梅里
 B.G.のおしやれする事だけおほえ 小石
 おしやれ今日齢より若い服で出る 一栄
 垢抜けをしていのおしやれ女らし 八郎
 菓立の娘へおしやれ売気のコマーシャル 進之助
 もてそうもなのおしやれ気がつかい 南宗
 ベレー帽おしやれではない充ててます 好郎
 いい意味のおしやれと言葉つけ加え 水客
 おしやれして見ても所詮は美女でなし 孝風
 本当のおしやれ下着に気を使い 雄々
 おしやれでは無いのと整型手術うけ 狂二
 二十才にもなつておしやれはと欲しい 満秋
 おしやれゆきすぎてグロテスク 満秋
 おしやれも去年のままの娘ではなし 小松園
 思春期のおしやれズボンの寝押しから 一栄
 靴ずれを出しておしやれ帰って来 三司
 パトロンが出来ておしやれ忙がしい 一声
 年頃のおしやれをせよとコマシヤル 宗義
 男までおしやれをせよとコマシヤル 文秋
 舶来のおしやれにお目の色を変え 句念坊
 おしやれする気分になった回復期 李鳥
 おしやれコーナー半分月給吸い上げる 李鳥
 片親で育つておしやれやれしたがらず 白溪子
 おしやれする娘がいて部屋の名めかし 明朗

川雑 阿倍野支部吟行 (真面)

金井文秋報

試歩の杖緑の露に濡れてくる 良馬
 滝を背に小さく俺が写つてる 静人
 新緑へ春の服やら夏の服 玲人
 ホスらしい猿はチヨコチヨコ動かない 恒明
 建て増しはしたし緑は残したし 文蝶
 キヤラメルを猿にとられてうれしがり 圭井堂
 おにぎりに青葉の色が染りそう 柳志
 人間が来た来たと猿が寄り 文秋
 杉並木緑は高い位置にあり 梅里
 無料とはほりだらけの休憩所 一栄
 見てあかぬ滝に体温奪われる 小松園
 滝になりたぬ滝は雑音寄せ付けず 洋敏
 行楽地一人ぼっちがさびしそう 泰徳
 団地だけ増えて緑はげずられる 満潮
 滝の音愛の言葉はかき消され 専翁
 立小便お猿珍らしそうに見る 義介
 人馴れた猿が出て来て滝近し 双葉
 ハイカーも緑にとけて見えかぬ 八郎
 奥山の二尺の崖も滝のうち 生薑
 みどりの血吐いて芋虫つづまる 宗義
 廻り道したのに嫌な奴に逢い あいき
 舗装した故郷の道に親しめず 弥生
 許されぬ人追いすがる時刻表 弥生

色紙短冊
 書画用品
 大坂戎がし
 丹精堂
 本町三丁目

揉めそうな定刻通り来る 小松園
時刻表を趣味で眺めて旅に出ず 圭井堂
時刻気にしいすかんな判を捺し 柳宏子
あの人が通る時刻で落ちつけず 宗義
銀行無情ちようど時間となりました 好郎
オールナイトもう丑満だなどという 白柳
時刻が時刻アベックとがめられ 水京
忠実に時刻を守り平のまま 清子
嬉しさは同じ時刻にまた出合い 南宗
待たす気で時刻すらして来たけれど あいき
取引がすめば紳士にたちかえり 良
取引が済んで女が先に出る 東天紅
腰ひくいけれど取引はじめつけ 一舟
悔のない女になって夜の街 八郎
夜の街女ばかりが目について 野菜
夜の街これが昼来た街かいな 一栄
赤い灯に負けず財布をしかと待ち さかえ
ワントンの遠笛で夜の街 双楽
ボン引が鴨を捕えた夜の街 市郎
夜の街巡査の顔も引きしまり 玲人
夜の街女は生きる場所を持ち 柳志
長雨に晴耕雨読とも行かず 文蝶
五月雨も嫌という程降り続き 喜仙
長雨に頭の中まで湿りきり 庸佑
血を売って稼げぬ雨を宿に寝る 専翁
はったりを税務署だけが買いかぶり 文秋
はったりを信じて母は疑わず 静馬
はったりで建てて利息に追われどり 梅里
素足なら素足で男の眼が動き 生薑
恒明

川雑 玉造支部句会 (大阪市)

長雨に今日も濡れて行く小商人 井平
雨の音聞きもう一度寝てしまひ 義介
窓の雨病人だけのものになり 天樹
雨足のはげしき激怒しずめられ 柳宏子
誘拐で神経つかう国なまり 水京

西出一栄報

浴槽に故郷しのぶ 菖蒲浮き 国雄
高蒲律儀葉っぱ根元でそろそろ 風仙洞
高蒲湯のゴミがひつて仕舞風呂 文秋
部屋荒れ困つたものを目尻下げ 美彌子
男の子だなんて床屋に念おされ 城東
養子筋よくも出かした男の子 政子
助産婦の声もはずなつた男の子 あいき
共学できれいになつた男の子 清子
これまでに泣いてはならぬ男の子 六竜子
裏話聞き尊敬の仲間入り 一舟
尊敬へなるほどと云うエピソード 一栄
尊敬する人物欄へ父と母 珠笑
誘拐されたらと憎まれ口叩く 珠笑

歎声のテレビへ不貞寝起きてくる 珠笑
公開捜査また指名犯一人減り 天真
借り物の帯に残した汗のしみ あいき
律儀者汗流す程儲からず 寿美司
口下手がする弁解の鼻に汗 井平
青虫が青葉の裏で安住し 一栄
五月雨に青葉優しく叩かれる 城東
目に青葉娘の服も染まりそう 水京
屋上の仕上げへ一服する眺め 是江
狭き土地屋上のある家を建て 国雄
屋上へ出てもやもや捨てて来る 草々
グラウンドの青葉態を添えて居り 美祿子
屋上より落ち来るボール 今日三つ スエ子
屋上のベンチへ頭脳労働者 六竜子
ここは朝日向いの屋上ギリンです 八郎
人臭いなと屋上に蠅がいる 白柳
屋上でビールに酔うて風邪を引き 清子
合格の歎声電話でまで走り 文秋
歎声がひいき倒しと気づいてず 一舟

川雑 ハワイ支部句会 (ハワイ)

下積へ新任課長も気を使い 万里歩
下積のアイデアも聞き社は栄え 浅太

築山快夢起報

下積の若さ社長を批評する 坪山
俗塵を入れず下積理想論 笑有
栄枯盛衰下積だつて今に見ろ カロ女
青雲の霸気下積のままで 柳葉
下積と云う気安さのあぐらなり 麗花麗
下積のまま停年を惜しがられ 平八郎
下積のまま押しきって定年期 峯円
酔うほどに下積愚痴を並べ出し 暁舟
下積に甘んじ氣楽な日を過し 泉水
下積の不平も云わず主義に生き あき坊

田中鳥雀報

眼を閉じると秒速の虹横切る 枯粒
秒速麻痺人間痴呆の距離歩く 磯
内心を讀んで情の紙づゝみ 美佐緒
内心に期することあり指ならず 尚平
ため息をついて内心いたわりぬ 司郎
緑色の血を吐き芋虫つぶされる 生薑
血を吸うてはり殺される蚊の因果 句楽坊
裏面をさかのぼると閑僚の一人 ゆきら
袂の裏に簪が立っている 全子
笹の裏面にでんぐ虫の孤独 紫蘭
明眸の底に冷たく住む理性 和三郎
明眸の幸せ薄き泣き黒子 王石

川雑 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄報

天引きであるから会費完納し 照路
百円の会費で帰れぬ程に酔い 一声
入会と一緒に会費も取られ 浄美
女房には会費追加と言ひ逃れ ごろう
会費だけで済ます料理が粗末すぎ 佐加恵
二次会費紅一点は許される 宗義
総会では会費の値上げだけ否決 藪虎狼
会費だけ飲む気の腰をデンとすえ 葵丘
二次会の会費へ愚痴をつけた出し 飴ん坊
むつむしが会費の行方までたじ 秋月

会費より折れて曲つたほどに酔い 幽谷
二次会の会費はもてた奴がもち 三平
会費切れのはがき淋しい音で着き 久米雄

野村味平報

嫁ぎし娘驚く程のがめつさや 浪寿
驚きが喜びに変わる聞き違い 味平
あの年令で驚くはかり派手を着る 光郎
靴をはき剣を片手に独り者 六角
さつそうと恋へ近づくハイヒール 一路
靴持って跣足で帰える俄雨 雅城
女團に靴一足の光りよう 醉羊
のび盛り子の靴履けず捨て切れず 久雄

尼祿之助報

横綱が似合う娘の八等身 独仙
寄り添うた妻に若さのある月夜 李朋
言訳を妻は背中ではねかえし 芳正
言訳の方が余計カシにふれ 健太郎
何か知ら合掌したくなる異変 正治
進学も裏口からのすべり込み 草人木
よく廻る舌で言訳執行部 晃男
言訳をせぬ子へ我が血見つけたり 岬月
すべり込みセーフ人生又変り 緑之助

横山一声報

ふとある日菩薩の像に魅せられる 芳月
母さんの魅力のわかる年になり 美枝子
女の魅力百万の人に名をかかせ 愛
魅力だった辛抱甲斐の椅子につき 竜泉
美容師の腕にかかっている魅力 秋月

川雑 備前支部句会 (岡山県)

好きな方に魅力をつくるにあせり 一声
 懐に魅力があてもてて居り 東岸
 黒髪の魅力やっぱり捨て切れず のぶ子
 魅力ある女の憎い片えくほ 伊久野
 うす物の魅力女の線を出し 胡風
 薄れ行く魅力へ女金を便め 芳月
 マネキンの魅力造花に似てあかれ 幸仙
 男たちあちらと猪口がついて居り 久米雄
 男たちばかりの酒に一人立ち 計
 お堅いが票には弱い男たち 宗義
 二次会の話が早い男たち 新五郎
 夏場所の花火を散らす男たち 三六
 人間の欲が見つけた曲り角

川雑 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

つり銭のアルミ貨風にとばされる 無閑
 金力に意地と努力で立ち向かい 一保
 こわしたり建てり景気よ工場 素瓢
 忍耐の二字で無配の株をもち 雄々
 道徳を説く先生よりも 大人 天邪鬼
 ドル稼ぐプランもたてて観光課 詩郎
 失恋へ金魚は柔しくたわむれて 鶴丸
 失恋を笑顔でわびる趣味の友 吾柳
 七人の敵に廻して酔いづぶれ 喜夫
 定年が間近それでもすてぬ夢 一男
 弔電は秘書に打たせて温泉場 布堂
 病床で楽しみに待つ郵便屋 信子
 宍道湖へ声が流れる上候 祥月
 夢でした理想は砂の上の恋 みばり
 サービスも過剰になればいやなれ さまよ
 恋人がほしいベッドにいる孤独 昭子

川雑 木次支部句会 (高根県)

藤井明朗報

山登り茂みがあつてよい二人 和幸

むらさきの雲山みどり野もみどり 祥月
 山へ来て傷心山の灯淋しくて 綾美
 山あいのもやし分けてバスが行き 十九夫
 紙コップ貼つてる妻に励まされ 勇
 紙コップ旅の車中のほぐれて米 明朗
 紙コップにとまどいながら老夫婦 清泉
 十円を入れて見つめる紙コップ 昌

川雑 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花報

公用の顔でダイヤル廻しとき 実男
 ダイヤルを奪い合いて聞くうざり 千里
 ダイヤルを廻すそれにも人の癖 盤茶
 ダイヤルを子に廻させて夫呼び 東村
 思索してダイヤル廻す子の微熱 万年青
 一度ずつ廻してのぞく電話帳 しげる
 姉弟でラジオのダイヤルうはいあい
 ダイヤルの彼氏が今日は欠勤し 生薑
 朝刊へダイヤル廻す好いニュース 南風
 ダイヤルの穴へ土工の指が無理 山峰
 ダイヤルの文字もどかく母キョク 蘇生
 ハミングで廻すダイヤルに恋があり 弘道
 考えて考えてダイヤル又違え 六花

川雑 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

たんぼほも土筆もよけて歩く春 勝子
 自販車を預けて帰る千鳥 足古
 天才の歩けはパンツが落ちかき 寛
 小説を手に店番の腰をすえ 三郎
 店番のお稻荷様へ灯がとほり 斐山
 店番の好みでダイヤル廻される 勝喜
 店番の主人の方があいそよし 幸葉
 まあ上げぬげと暑さを取つてくれ 佳
 セールの暑さこなすコーナー 天花
 麻雀で二泊の夜が無事な旅 康之介

田舎から磨けば光る娘が米 竹比呂
 母の日の河が足してるプレゼント 喜代女
 欲望に負けたある日の借用書 利子
 下駄の緒まで四十の柄を選び 松風
 船足を波にまかせて糸垂れる 未遂

南海電鉄川柳会 (大阪府)

辻圭水報

ホステスは指名にうれしい悲鳴の 句念坊
 積み残されその上財布すられた 圭水
 ケンカここで定員と打切られ 国次
 初めから計画的の積み残し 勉
 発表日積み残された黙りよう 宏子
 積み残し駅長済まない顔もせず 貴山
 ラッパも矢つ張り積み残されていた 和郎

どんぐり川柳会 (羽曳野市)

吉川静波記

二日目の宿でまた合う新婚組 ひとみ
 掃除婦のうちでは帚の重いこと 紀太呂
 どこまでも掃いて行きたい朝の庭 浪路
 叱られたあとの掃除の派手なと 弥生
 掃除婦も一円玉を掃きとばし 万竿
 力仕事すめば男手じやまになり けいこ
 一念発起ますみき出しの掃除から 史好
 仲人が去んで二人の顔となり 広坊
 顔で売るスターはいつか座を追われ 小桜
 困地族隣同志で知らん顔のぶ子 ひろし
 知らぬ顔していかれたにチャットけ あすか
 揃え膳の旅に母さんもてあまし 八重子
 服装が先に気になる女旅 静波
 顔出した途端に噂きりかえる 凡子
 整形の鼻が気になるコンバクト 阿キコ
 母と来た旅はたがいに流し合い

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

積立てが出来たら旅行惜しくなり 常人
 万緑の旅へ父はは出してやり 痴亭
 議員やめ初めて知ったのんびりさ 菊代
 のんびりとやつた選挙が図にあたり 呑天
 当選の自信のんびり報を待ち 栄一郎
 女房も子供も留守でひるねもし 笑照
 誘拐事件のんびりしてたあむよう 東雲楼
 安売りと聞けば割込む女房なり まさる
 割込みに食べさしの折提げてる 吉太郎
 美粧院デン話一つで割り込まれ 花梢
 わり込んでもうけなはれとほらい口 美代
 だしぬけの電話身代金を要求し 将鴻
 だしぬけに黄色い声にだきつけれ 静林庵
 約束を破って愛情たしかめる 八郎
 写真帖約束かわした頃の妻 日出男
 約束を冗談にする年のころ 岸柳
 約束はあの想い出のすきや橋 すみれ
 約束も三日坊主でのみ始め 半月
 約束の帯はと妻につめ寄られ 摩天郎

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

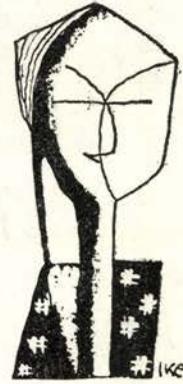
大萬

料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇
 TEL(六三三)三九三五番

飯の店 アベノ橋近地下食通街
 TEL(六三三)〇一四七番

串の店 南区豊屋町三ツ寺センター
 TEL(三二二)九一八四番

柳 樽 室



路 郎 生

★編集局の暑さは汗の
にじみ出る暑さだ。山
へも海へも行くヒマの
ない編集局だからであ
る。

★薫風子が、叟乃、セン、セ、
いに次ぐ暑さという造
語を作ったが、叟乃は
六月に入ると、もう暑
い暑いと連発、一日に
何回となく汗を拭く。
そのあとへケンカンの
汗をすり込み、からだ
の手入れにオサオサ怠
りなしである。汗と云
えば小生は五年前に休
れてから真夏の暑さに
も汗の出ないからだに
なっていたが五年目の
ことしの夏には人並み
に汗が出るようになって
た。少々暑くても、こ
のよろこぶべきかの現
象にいささか気をよく
している。

★七月七日には既報の
川雑川柳まつりが北極
星の四階で挙行され
た。役員諸氏がわがこ
とのように
それぞれ
部しよに懸
命の努力を
払って下さ
ったので、
お蔭でう
れしい一日
を消すこと
が出来た。
各地から多
数顔を見せ
てもらった
ので、これ
に越したよ
ろこびはな
かった。

暑中御見舞申し上げます

川柳雑誌社

- 麻生路郎
- 麻生路乃
- 中島生々庵
- 北川春巢
- 戸田古方
- 清水白柳
- 正本水客
- 真鍋一瓢
- 水谷竹荘
- 橘高薫風子
- 西田柳宏子
- 句会部
- 黒川紫香
- 菊田いさむ
- 総務部
- 八木摩天郎
- 林宏子

★本号は川柳まつりの
記事その他が幅鞆した
をお願いする。

ので、東野大八氏の随
筆「古きよき友の手紙
から」、奥津啓一朗氏
の「明治・大正柳誌巡
礼」や石曾根民郎と橘
高薫風子両君の対談其
他を次号へ割愛さして
もらった。従って小生
の「窓口談義」も休載し
た。

★編集局では七月中旬
に正本水客氏を編集部
員として迎えた。
★昨年の夏は青森・仙
台・東京への旅をし
て、多くの柳友に会っ
たが、ことしの夏はど
こへも出かけるヒマが
なかった。
★秋はそれ文化祭だ。
作品展だと、きりぎり
舞いさされるので旅行
なんてのぞみ薄だ。で
も夢のプランだけは企
画するつもりだ。
★下記「社告」の通り
本号から本誌の値上げ
を断行することとなっ
た。この値上げによっ
て更に内容を充実し
て、愛読者諸氏の眷顧
に応えることを、誓う
ものである。私たちは
常に上向きでありたい
と思っている。その意
味からも本誌の将来を

社の黒板

- ☆川雑支部句会 八月
- ☆南海電鉄句会 15日
- (木) 六時、題、球場
- ・残酷・まきぞえ
- 所、難波高架下親和ク
- ラブ、☆玉造句会 10
- 日(土) 六時半、題、
- ブル・工事・父、
- 所、市電玉造南百米大
- 阪信用金庫、☆明和研
- 究句会 11日(日) 一
- 時、題、球・蟬・帰
- 省、所、阪神鳴尾駅下
- 車東南二百米鳴尾公
- 民館☆かがみ句会 2
- 日(金) 一時、題、月
- ・専用・見舞・雑談・
- 欲張り、所、鏡野池田古
- 心居、☆京都句会 16
- 日(金)夕、題、素足・
- 神秘・螺旋、所、四条
- 繩手仲源寺、☆阿倍野
- 句会 20日(火) 七
- 時、題、本物・裏話・
- あつさり・丸出し、
- 所、阿倍野区松崎町三
- ノ一〇割烹大万、☆富
- 柳会句会 10日(土)
- 七時、題、へそくり・
- うら盆・西瓜・所、富
- 田林市間中居

期待され一層のご支援
と、ご愛読をお願いす
る。

好評の「句帖」が売切れていました
が、近く第二集を発行することにな
りました。あなたの句を書き遺すた
めにご利用下さい
一部八十円 送費二〇円

ご注文は川柳雑誌社サービス部へ

社告

(八月号より)
一部二二〇円

★本誌は皆さまの雑誌なので、なるべく
誌代をお安くすることをモットーとして
刊行してまいりましたが、印刷費が昨年
一回、本年に入って既に二回の値上げと
なり、紙代から製版代にいたるまであら
ゆる資材が値上げとなり、出血サービ
スも限度となりましたので、八月号から誌
代一部二二〇円に値上げさせていただきます
こととなりました。これによって今後誌
面の改善をはかりたい念願です。ご諒承
の上一層のご愛読をお願いいたします。
★前金納入の方は誌代切まで従来の値段のま
までお届けいたします。

発行所

川柳雑誌社

明日を勝ちとる

新発売

細胞に飛びこむ活力剤



ヘルタス

L-アスパラギン酸塩製剤

ヘルタスは高単位剤(150mg)です 30錠 350円・60錠 600円・150錠 1,300円
サンプル・説明書贈呈 大阪市東区道修町 大日本製薬株式会社(ヘルタス係)



川柳

親ごころ子心

若本多久志著 麻生路郎序

価 150円
送費50円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である。登載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることに出来る実に有意義な書である。

東野大八著

風流 人間横丁

価 250円
送費70円

B 6型二五八頁

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザツクバランスな人生批判が、その雄筆からほととびるさまは凄。まるで腕の冴えた板前の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

橋高薫風子著 麻生路郎序

川柳 句集



価250円
送費60円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って揉まれ、川柳編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

川柳雑誌社

振替口座 大阪 75050
電話大阪 (671) 6081

大阪住吉局区内
万代西5丁目25
発行所

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

- | | | |
|-------|--------|-----------|
| 立 姿 | (十句以内) | 菊沢小松園選 |
| 太 陽 | (十句以内) | 金井文秋選 |
| 退 職 | (十句以内) | 中村九呂平選 |
| 錦 魚 | (十句以内) | (八月十五日締切) |
| 京 都 | (十句以内) | 黒川紫香選 |
| 紅 一 点 | (十句以内) | 田中烏雀選 |
| | | 河相すすむ選 |
| | | (九月十五日締切) |

毎号募集

- | | |
|-----------------|-----------|
| 近作柳樽 (雑詠十句以内) | 麻生路郎選 |
| 川柳塔 (雑詠十句以内) | 北川春巢選 |
| 文章 (評論・研究・感想其他) | 麻生路郎選 |
| | (毎月十五日締切) |

投稿規定

▼投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼「課題吟」は誰でも投句が出来る。「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第三十八号
定価 一〇〇円 (送料六円)

(禁転載)
半年 七五六円
一カ年 一四四〇円 (送料負担)
昭和三十八年七月廿五日 印刷
昭和三十八年八月一日 発行

大阪住吉局区内万代西五丁目二五番地
編集兼発行人 麻生 幸二郎
行印刷人 麻生 幸二郎
発行所 **川柳雑誌社**
電話大阪 750811
振替口座大阪 750500

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿八年八月一日 発行(毎月一、五日発行)

編集者 麻生路一郎 発行所 川柳雑誌社

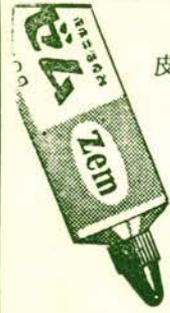
麻生路一郎 発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二番地 電話大阪(67)七六〇八一

長崎口津大阪七五〇五〇番

改正定価百二十円(送料六円)



皮膚病の中で一番多い

湿疹

くさ・ただれ・あせも

- ★カユミをすぐとり、掻くの忘れるほどです。
- ★慢性・頑固症にもよく効きます
- ★カブレず、ベトナム状で爽快です



ゼム

東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

寒冷線
生駒山

100万ドル回転展望台
摂河泉・大和山城・大阪湾・淡路島ひと目の大パノラマ (入館料…30円 こども20円)

納涼大会 8月31日まで
スリルのお化け屋敷 こどもの夢の園ファンシーランド 土・日 野外劇場アトラクション

山上涼風施設 生駒山ロッジ シルバーパングロー 山荘 展望大食堂 東洋一の大飛行塔 こども展望列車 雲上リフトのほか遊戯具

生駒駅から山上へ展望ケーブル16分片道70円

近鉄

麻生路郎先生著

川柳とは何か

—川柳の作り方と味わい方—

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたものもろろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 **川柳雑誌社**

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

価 二五〇円
送 七〇円

一家そろつてホーライ党

廣東料理

蓬萊

大阪なんば・TEL (641) 551-2